

カール・フローレンツと長谷川武次郎 ——ちりめん本による日本詩歌の海外発信

尾崎 るみ

はじめに

本稿では、カール・フローレンツ (Karl Florenz, 1865-1939、以下、フローレンツ) と長谷川武次郎 (1853-1936、以下、武次郎) の協働に光を当てる。これまで、『百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』に掲載された拙稿「弘文社のちりめん本『欧文日本昔噺』シリーズ誕生の背景——長谷川武次郎・デイビッド・タムソン・小林永濯の協働」(23号、2020年)、「弘文社のちりめん本『欧文日本昔噺』シリーズの形成と『西洋昔噺』シリーズの開始」(24号、2021年)、「長谷川武次郎のちりめん本出版活動の展開——『欧文日本昔噺』シリーズが20冊に達するまで」(25号、2022年)の3編において、1885(明治18)年に日本の昔話を外国語に翻訳した『欧文日本昔噺』シリーズの出版を開始した武次郎が、「縮緬紙」版の導入などによって事業を拡大し、1892(明治25)年末に同シリーズがついに20冊に達するまでを見てきた。ここでは、その後のさらなる事業の発展に大いに貢献したと考えられる、フローレンツによるちりめん本の出版に注目してみたい⁽¹⁾。

フローレンツとの協働によって誕生したちりめん本は、詩歌を扱った3作品、歌舞伎を扱った2作品、そして昔話を扱った4作品の存在を確認することが出来た。「日本のドイツ文学の父にしてドイツ日本学の開祖」(馬場、2020年、22ページ)とその業績が高く評価されるフローレンツだが、昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』には取り上げられておらず、『日本近代文学大事典』の解説においても、ちりめん本への言及はない。フローレンツの業績を最も詳しく論じていると思われる、佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』(春秋社、1995年)においても、彼が関与したちりめん本の刊行経緯やその内容は詳しくは論じられていない。石澤小枝子『ちりめん本のすべて——明治の欧文挿絵本』(三弥井書店、2004年、以下、『ちりめん本のすべて』)では、フローレンツによるちりめん本の概要が適確に紹介されているものの、それぞれの内容に踏み込んだ詳しい検討はなされていない。

しかしながら、近年、フローレンツによる『万葉集』詩歌の独訳に注目した、井上さやか「『万葉集』と欧文挿絵本——その今日的意義について——」(『万葉古代学研

究年報』第8号、2010年)、1900(明治33)年のパリ万博に武次郎が出品した、歌舞伎関連ちりめん本について論じた大塚奈絵による2本の論考、「テラコヤ(寺子屋)——「日本」を発信した長谷川武次郎の出版」(『国立国会図書館月報』604/605号、2011年)ならびに「木版挿絵本のインパクト——1900年パリ万博に出品された「寺子屋」——」(『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.14、2013年)、フローレンツの大著の意義を再検討した馬場大介『近代日本文学史記述のハイブリッドな一起源——カール・フローレンツ『日本文学史』における日独の学術文化接触』(三元社、2020年)などの出現により、前述のような状況に変化が起こりつつある。ここでは、フローレンツによる詩歌関連の3作品について、その刊行経緯と内容について検討し、武次郎の出版活動の一部をさらに明らかにすると共に、ちりめん本という形態でフローレンツが何をどのように発信したのかを検証したいと思う。

1. 発端——フローレンツと井上哲次郎の邂逅

まずは、フローレンツの経歴について、彼の来日の契機となった井上哲次郎(1855-1944、以下、井上)とのドイツでの出会いを中心に述べていきたい。1865(元治2)年1月10日、フローレンツは中部ドイツ・チューリンゲン州の州都エルフルト(Erfurt、旧東ドイツ)に高等小学校教師の父エドワードと母スザンナの長男として生まれた。母方の祖父は製本職人であった。少年時代より語学にひとときわ強い関心を持ち、アラビア語までも独学していたというフローレンツは、18歳でライプツィヒ大学に入学し、同大学東洋文化研究科でサンスクリット文献学を学んでいたが、20歳の時に恩師のガーベレンツ教授(Georg von der Gabelentz, 1840-1893、言語学者・中国学者)を訪ねて来た井上と出会い、日本にも興味を覚えるようになった⁽²⁾。

一方、井上は1855(安政2)年12月25日に医師の船越俊達と母よしの三男として大宰府で生まれた。地元や博多の漢学塾に通った後、長崎の官立広運館で英語を学び、東京開成学校予科を経て1877(明治10)年9月に東京大学⁽³⁾に入学。翌年に叔父・井上鐵英の養子となり、その後は井上姓を名乗った。哲学と政治学を学んで1880(明治13)年7月に卒業すると、文部省に入ったが、1882(明治15)年3月には文部省を辞めて東京大学助教授となった。外山正一^{まさかず}(1848-1900)らと共に『新體詩抄』を刊行したのは、同年8月である。そして、1884(明治17)年に哲学研究のためのドイツ留学を文部省から命じられ、1890(明治23)年10月まで約7年間をドイツ各地で過ごした⁽⁴⁾。

1885(明治18)年秋に井上はライプツィヒ大学に行き、1学期間だけ哲学の講義を

聴講したが、この時にフローレンツと出会った。井上は『懷舊録』（春秋社松柏館、1943年）でライプツィヒ滞在中の出来事としてガーベレンツ教授宅でのフローレンツとの出会いを挙げ、その後の交流についても、井上が自身の漢詩「孝女白菊詩」について解説すると、フローレンツはその説明を熱心にノートに書き留めていたなどと綴っている。井上の協力のもと、フローレンツは1887（明治20）年2月13日に「孝女白菊詩」のドイツ語訳を完成させている⁽⁵⁾。「孝女白菊詩」については第6節で詳しく述べるが、このライプツィヒでのふたりの出会いが武次郎との協働に結びつくことになる。

「本當に日本語を學ぶならば、日本に行かなければ駄目である。日本に行けば、漢文を學ぶことも出来る」（井上、1943年、219ページ）という井上の言葉はフローレンツの心に響き、彼の学問的関心も次第に日本研究に向けられていった。フローレンツは1886（明治19）年7月にライプツィヒ大学を卒業すると、同年10月からベルリン大学でサンスクリット文献学の研究を続けた。1887（明治20）年6月にはライプツィヒ大学から博士号を授与されている。

また、同年9月にベルリン大学に新設された Königl. Orientalisches Seminar（通称ベルリン東洋語学校、以下、東洋語学校）でフローレンツは1888（明治21）年3月まで日本語を週15時間、中国語を週8時間学んだが、東洋語学校の初代日本語講師はライプツィヒで知り合った井上であった。井上は3年間の予定でドイツに留学していたが、ベルリンでの日本語講師の仕事を打診されてこれに応じたのである。井上はフローレンツを伴って当時ベルリンにいた森鷗外を訪ねたり、ベルリン大学留学中の有賀長雄（1860-1921、以下、有賀）をフローレンツに紹介するなど、熱心に面倒をみた。

日本と中国についての知識を深めるため、私費で日本に2年半ほど滞在しようと考えていたフローレンツは、1888（明治21）年4月4日に帰国する有賀と共に南洋航路で日本に向かった。来日後、しばらく有賀の家に寄宿していたが、1889（明治22）年4月から東京大学講師の職を得て、大学構内で暮らし始めた⁽⁶⁾。1893（明治26）年4月からは本契約となり、「独乙語学独乙文学」ならびに「博言学」を教える「正教師」となった。

フローレンツは東京大学で教え始める前からドイツ東洋文化研究協会（Deutsche Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens、通称 Ostasiengesellschaft／東洋文化協会／略称 OAG オーアーゲー、以下、OAG）に入会し、東京や横浜で開催された例会でしばしば発表している。随時、発表内容は同協会紀要（*Mitteilungen der Deutsche Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens*、略称 MOAG、以下、MOAG）に投稿され、掲載された。1888（明治21）年12月19日の例会で発表したの

は、ベルリン時代に研究した李白と井上の漢詩についてであった。その後もフローレンツは積極的に日本の文学や文化についての研究を発表し続けるが、その内容は日本文学史、『日本書紀』、神道、歌舞伎、そして同時代の詩歌に至るまで多岐にわたっている。OAGでの発表内容はその後刊行されたちりめん本に反映されただけでなく、東京大学に提出され、1899（明治32）年にフローレンツを外国人として初めての博士号取得者とした『日本書紀』神代の巻に関する研究論文ならびに1906（明治39）年にアーメンク社から刊行された、『東方文学叢書』の最終巻・第10巻の600ページを超える学術研究書、*Geschichte der japanischen Litteratur*（以下、『日本文学史』）に結実することになった⁽⁷⁾。

フローレンツは次第にOAGの中心的メンバーのひとりとなり、1908（明治41）年には副会長に選出された。なお、入会時期については不明だが、フローレンツは英米人が中心となって1872（明治5）年に設立した日本アジア協会（The Asiatic Society of Japan、略称ASJ、以下、ASJ）にも入会し、同協会紀要（*Transactions of the Asiatic Society of Japan*、略称TASJ、以下、TASJ）にも投稿している。

1914（大正3）年7月に26年間に及んだ東京大学での教員生活を終えて帰国したフローレンツは、ハンブルク植民学院（現ハンブルク大学）の教授に就任し、1936（昭和11）年に71歳で退職するまで日本学を教えた。同学院の日本学講座は、ドイツの高等教育機関に設けられた、初めての日本学の講座であった。フローレンツはここでドイツにおける日本学の基礎を固め、後進の育成をはかった。また、東京大学でフローレンツの指導を受けた学生の中からは、多くの研究者が誕生した。

フローレンツ来日のおよそ1年後、1890（明治23）年10月13日に帰国した井上はただちに東京大学教授となり、翌年には文学博士号を取得。哲学を講義する一方で教育勅語の公式解釈書といえる『勅語^{えんぎ}衍義』を刊行した。1893（明治26）年1月に『東洋學藝雑誌』に井上が発表した論説「教育と宗教の衝突」が契機となって、キリスト教徒らとの間に〈教育と宗教の衝突〉論争が起こっている。井上は1923（大正12）年3月に東京大学を退官した後、大東文化学院（現大東文化大学）教授となり、1925（大正14）年3月には大東文化学院総長に選出された。同年10月には貴族院議員となったが、翌年秋に起きた筆禍事件で総長ならびに貴族院議員の職を辞している。

2. 広がる人脈——チェンバレン、ハーン、そしてロイドへ

武次郎がどのようにフローレンツと知り合ったのかという疑問への明確な答えとなる資料は見当たらないが、1889（明治22）年4月に東京大学講師となったフローレン

ツは、1890（明治23）年3月に健康上の理由で一時帰国願いを提出し、その後東京大学を辞めたバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850-1935、以下、チェンバレン）が受け持っていた博言学の授業を1891（明治24）年秋から担当している。フローレンツとチェンバレンが同僚として過ごした期間が1年間はあったことになるので、ふたりは遅くともこの頃には知り合っているはずである。

なお、武次郎の『欧文日本昔噺』シリーズに強い関心を示し、後に *The Boy Who Drew Cats*（『猫を描いた少年』）などのちりめん本の著者となったラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn, 1850-1904、帰化後は小泉八雲、以下、ハーン）ともフローレンツは親交があった。ハーンは1890（明治23）年4月に来日し、同年8月末に松江中学校に英語教師として赴任したが、フローレンツはその翌年7月にハーンを松江に訪ね、数日間滞在している（平井、1970年、409ページ）。また、チェンバレンの英訳『古事記』を読んでいたハーンは、友人からのチェンバレン宛紹介状を携えて来日し（平井、1970年、398ページ）、来日直後からチェンバレンの恩義を受けている。

武次郎の孫にあたる西宮雄作から武次郎が残した書簡や書類の調査を許された著名な美術品コレクターならびに作家のフレデリック A. シャーフ（Frederic A. Sharf, 1934-2017、以下、シャーフ）は、1891（明治24）年夏にハーンを訪ねたフローレンツは、その後ハーンと共にチェンバレンの *Handbook for Travellers in Japan*（『日本旅行案内』または『日本案内記』と呼ばれる）の改訂⁽⁸⁾に必要な現地情報収集のために杵築（現在の出雲市大社町付近、出雲大社所在地）を旅したと述べている（Sharf, 1994年、42ページ）。このような交友関係の中から、フローレンツはごく自然に武次郎のちりめん本出版活動を知ったものと考えられる。

ここで、フローレンツのちりめん本2冊を英訳したアーサー・ロイド（Arthur Lloyd, 1852-1911、以下、ロイド）にも言及しておきたい。ロイドの経歴を見ると、フローレンツによる詩歌の独訳を英語に重訳するという仕事にまさに打ってつけの人物であったことが分かる。ロイドはインド駐在の英国陸軍少佐であった父フレデリックとドイツ生まれの母の間に長男として1852（嘉永5）年4月10日にインド北部パンジャブ州の都市シムラ（Simla）で生まれた。ロイドが4歳の時に父親が病死したため、8歳で母親とドイツに渡って初等教育を受け、イギリス中西部のブレウッド・グラマー・スクールを経て1870（明治3）年、18歳でケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジに入学した。古典学を優秀な成績で修めて学士号を取得したが、将来のインド宣教を視野に入れてさらにドイツのテュービンゲン大学でサンスクリット語を学んだ。英国国教会の職位を得て、1875（明治8）年から1879（明治12）年までリバプールやケンブリッジの教会で牧師補として務める一方、ケンブリッジ大学から修士号を授与されて同大学ピーターハウスのフェローならびにディーンを務めた。その

後、教区牧師として働いていたが、海外宣教への思いを強め、英国海外福音宣教会（The Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, 略称 SPG、以下、SPG）にインド行きを志願した。いったんはカルカッタ派遣が決まったものの、最終的には日本での宣教に従事することになり、1884（明治17）年8月に家族と共に来日した⁽⁹⁾。

ロイドは宣教活動のかたわら1885（明治18）年2月から慶應義塾で英語教師として精力的に働いたが、1890（明治23）年8月、妻の転地療養のためにカナダに赴いた。妻の死後、1893（明治26）年に日本に戻ったロイドは慶應義塾に復職し、学部文学科の2代目主任教員となった。SPGへの復帰は許されなかったため、ロイドは日本聖公会第2代主教のジョン・マキム（John McKim, 1852-1936）の推薦で1897（明治30）年にアメリカ聖公会所属宣教師となった。立教専修学校・立教英語専修学校長を経て、1898（明治31）年から1903（明治36）年まで立教学院総理を務めた。

フローレンツとロイドが知り合うのは、ロイドの再来日後であった可能性が高い。ロイドの論考がTASJやMOAGに掲載されるようになるのは1894（明治27）年以降のため、ロイドがASJならびにOAGに入会したのはこの頃ではなかったかと考えられる。

英語、フランス語、ドイツ語、日本語の4カ国語を話すことが出来たほか、ギリシャ語、ラテン語、ヘブライ語、パーリ語、サンスクリット語を読むことが出来た（白井、1999年、175ページ）というロイドと、少年時代からさまざまな言語を学び、大学でサンスクリット語、中国語、日本語などを学んで来たフローレンツは、ただちに意気投合したに違いない。語学に長けて日本の文学や文化にも深い関心を持つロイドに、フローレンツは迷いなく英訳を依頼したことだろう。1903（明治36）年4月、ロイドは東京大学にハーンの後任として招かれて英文学を教え始め、同年にASJ会長に就任した。1911（明治44）年10月27日に脳溢血で急逝するまで、教育、翻訳、著述、仏教を中心とした日本研究などの各方面で活躍を続けた。

3. 『東の国からの詩の挨拶』の刊行とその特色

フローレンツが東京大学の「正教師」となった翌年の明治27（1894）年8月、*Dichtergrüsse aus dem Osten : japanische Dichtungen* というタイトルの大部なちりめん本が武次郎によって刊行された。このドイツ語タイトルを直訳すると、『東の国からの詩人たちの挨拶——日本の詩歌』となるかと思うが、刊行当時、この本は『東方よりの表敬』または『独訳和歌集』と呼ばれたという（佐藤マサ子、1995年、

218ページ)。本稿では、『ちりめん本のすべて』に示され周知されている『東の国からの詩の挨拶』という邦題を用いることにする。

OAGの例会で日本の文学や文化に関する発表を重ね、それらを基にした論考がMOAGに次々と掲載されていたフローレンツが、自身の研究成果に相応しい、木版多色刷りの挿絵を添えた本を編んでみたいと考え始めたとしても不思議ではない。製本職人の娘であった母親と教師の父親のもとに生まれたフローレンツは、その成長過程において美しい書籍に触れる機会が少なくなかったはずである。だからこそ、印刷技術先進国ドイツの書物とは異なる和装本、優れた木版多色刷り技術、和紙の特性を生かした加工といった特徴を持つちりめん本にことさら魅力を感じたのかもしれない(佐藤マサ子、1995年、218ページ)。

シャーフが、フローレンツからの武次郎宛書簡ならびにフローレンツとドイツ・ライプツィヒの出版社であるアーメランク社(C. F. Amelangs Verlag)の間でやり取りされた書類が多数現存すると証言している(Sharf, 1994年、42-43ページ)ことから、『東の国からの詩の挨拶』は、武次郎の企画によるものではなく、自らの研究成果をちりめん本という形態で出版したいというフローレンツの希望に沿って誕生したものであったことが明らかである。フローレンツの要望に沿った本づくりを武次郎が請け負い、ヨーロッパでの販売はアーメランク社に託すという取り決めがフローレンツの介在によって刊行に先立ってなされていたと考えられる。ライプツィヒ大学卒のフローレンツにとって、地元のアーメランク社は自著の販売を委ねるに相応しい、信頼できる出版社であったに違いない。

他のちりめん本出版の場合と同様に、『東の国からの詩の挨拶』についても、まずは平紙本が刊行され、これに続いて「縮緬紙」版が刊行されたと考えられる。東京女子大学比較文化研究所所蔵ちりめん本コレクション(以下、東京女子大学ちりめん本コレクション)には『東の国からの詩の挨拶』の平紙本第9版(電子化No.0230)が所蔵されており、デジタルアーカイブで公開されているのでこれを参照したい。興味深いと思われるのは、『東の国からの詩の挨拶』の平紙本の扉には、‘AUSGABE AUF HOSHŌ PAPIER’([奉書紙版])と記されている点である。本来であれば最初の〈O〉に長音記号が付されるべきではあるが、武次郎のちりめん本出版において、紙質が明記された初めての例である。これは、フローレンツあるいはアーメランク社の意向に沿った措置と推察される。

『東の国からの詩の挨拶』の平紙本第9版のサイズは、縦24.3センチ×横18.2センチとされているが、これは、*Kohana San*(『小花三』、以下、『小花三』)の平紙本(縦25センチ)と同一サイズと考えられる。1892(明治25)年に刊行された『小花三』は、アメリカ海軍士官F. M. ボストウィック(Frank M. Bostwick, 1857-1945、以

下、ポストウィック)による、詩に挿絵を添えた楽譜付きの詞華集で、それまでに刊行された平紙本の中では最も大判であった。武次郎は『東の国からの詩の挨拶』の平紙本にも、これと同等サイズの奉書紙を採用したのである⁽¹⁰⁾。

しかしながら、『小花三』が全12丁の小品であったのに対し、『東の国からの詩の挨拶』はその4倍以上の大部な作品となった。そのため、1893(明治26)年刊行の*The Story of Coodles: The Only Coodles*(『いとしのクードルズ』)で初めて導入されたページ表示が適用されることになった。それまで、最も長い作品は、1889(明治22)年刊行の*Princess Splendor: the Wood-cutter's Daughter*(『竹取物語』)であったが、これにはページ表示はなかった。フローレンツの『東の国からの詩の挨拶』において、武次郎はサイズにおいてもボリウムにおいても『竹取物語』をしのぐ作品の刊行に成功したのである。そして、その発信内容も、伝承物語の世界から伝統的文芸の世界へ新たな一歩を踏み出したといえるだろう。

『東の国からの詩の挨拶』平紙本第9版奥付には、「明治二十七年八月二十日第一版発行」、「同三十九年九月十五日第九版印刷／同年同月二十日第九版発行」と記され、発行者は「東京市四谷區本村町廿八番地 長谷川武次郎」、印刷者は「同市麴町區土手三番町廿七番地 金子徳次郎」となっている。本村町の住所は、1906(明治39)年当時の武次郎のものである。

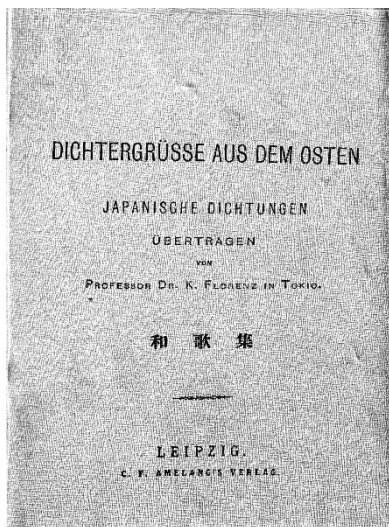
『東の国からの詩の挨拶』は平紙本も「縮緬紙」版もどちらも版を重ね、武次郎が生み出したちりめん本の中でも特に売れ行きが良かった作品である。『東の国からの詩の挨拶』では、多くの場合、版を重ねた作品であることが一目で分かるように表紙と帙(紙製の外函)に版表示がなされているのだが、そのような表示があっても、奥付には初版の刊記のみが記されている場合も少なくない。また、逆に、表紙に版表示がなくとも奥付から後の版と判明する場合もある⁽¹¹⁾。現在、『東の国からの詩の挨拶』の平紙本ならびに「縮緬紙」版は、国立国会図書館をはじめとして、国際日本文化研究センターや多くの大学図書館に所蔵されているが、そのほとんどは明治後期に刊行された、版を重ねたものであり、奥付に示された武次郎の住所もその時々のものである。管見では、国内で平紙本の初版を所蔵しているところはないようである。

「縮緬紙」版については、架蔵の1冊が初版本と思われるので、その書誌を詳しく述べておきたい。なお、管見では、国立国会図書館、関西大学図書館、京都外国語大学付属図書館ならびに九州大学附属図書館が所蔵する「縮緬紙」版『東の国からの詩の挨拶』も初版本だと思われる⁽¹²⁾。

まず、表紙には、すべて大文字で上部に'DICHTERGRÜSSE/AUS DEM OSTEN'、中ほどに'JAPANISCHE/DICHTUNGEN/VON K. FLORENZ.'とタイトルと著者名が記されているが、これは活版印刷によるものではなく、版木に彫

られた手書きアルファベットによって記されている。初期の『欧文日本昔噺』シリーズの表紙にも見られるものだが、鈴木華邨の没年が1919（大正8）年と記されていることから、同年以降に作成されたと思われる‘HASEGAWA PUBLISHING CO.’の *CATALOGUE OF JAPANESE COLOUR PRINTS, ILLUSTRATED BOOKS ETC.*（中野幸一・榎本千賀（編）『ちりめん本影印集成 日本昔噺輯篇 第4冊』）に取められているカタログ3種のうち、最後に掲載されているもの、以下、『HASEGAWA 販売カタログ』）ではこれを‘woodcut script’（〔木彫文字〕）と称しているため、以後はこのような表記を「木彫文字」によると表したい。なお、これとは別に1898（明治31）年頃に作成されたと思われる *List of Books*（『長谷川武次郎出版目録』、東京女子大学ちりめん本コレクションのデジタルアーカイブにて公開：電子化 No.0113、以下、『長谷川武次郎出版目録』）も存在するので区別して言及していきたい。

表紙の絵については第5節で詳しく述べるが、右上部に富士山、左手からその山頂を目指すかのような龍の姿が描かれている。扉には、活字で‘DICHTERGRÜSSE AUS DEM OSTEN/JAPANISCHE DICHTUNGEN/ÜBERTRAGEN/VON/PROFESSOR DR. K. FLORENZ IN TOKIO./和歌集/LEIPZIG./C.F.AMELANG’S VERLAG.’と記されている（図1）。扉見返しには、上部中央に「(2)」と括弧入りのアラビア数字によるページ表示があり、中央に「版權所有」の4文字、その下に‘ALLE RECHTE VORBEHALTEN/DRUCK, ILLUSTRATIONEN & PAPIER./VON/T. HASEGAWA./10, HIYOSHICHO, TOKYO, (JAPAN).’と印刷されている。見返しからこのページまでに挿絵はない。次に亡き恩師・ガーベレンツ教授への献辞が石碑と桐の花を描いた挿絵に示され、その次のページには左下に竹製の桶に挿した紫陽花などが描かれているが、挿絵への配慮からかこれら2ページではページ表示が省略されている。次に、上部中央にページ表示「(5)」が置かれた目次へと続き、9ページから訳詩のタイトルならびに訳詩文による本文が始まる。本文最終ページは96ページで97ページの‘ANMERKUNGEN.’（〔注解〕）には15の注が並んでいる。注解ページをめくると現れるのは、和装本の場合の扉題に相当するもので、すべて日本語で記されている。匡郭で縦に三分割されたスペースの右部分に縦書きで「日本帝國大學教師/獨乙帝國文學博士/カール、フロレンツ纂譯」、中央部分に大きな太字で「和歌集」、左部分に「日本 東京日吉町 長谷川商店發行/獨乙 ライプツィグ アメラング發賣」と活版で印刷されており、枠の上部には「版權所有」の4文字が記されている。扉ページと巻末に「和歌集」と記されているために、当初この作品が『独訳和歌集』と呼ばれたのだと分かる（図2）。



(図1) 『東の国からの詩の挨拶』
(初版) 扉 (筆者所蔵)



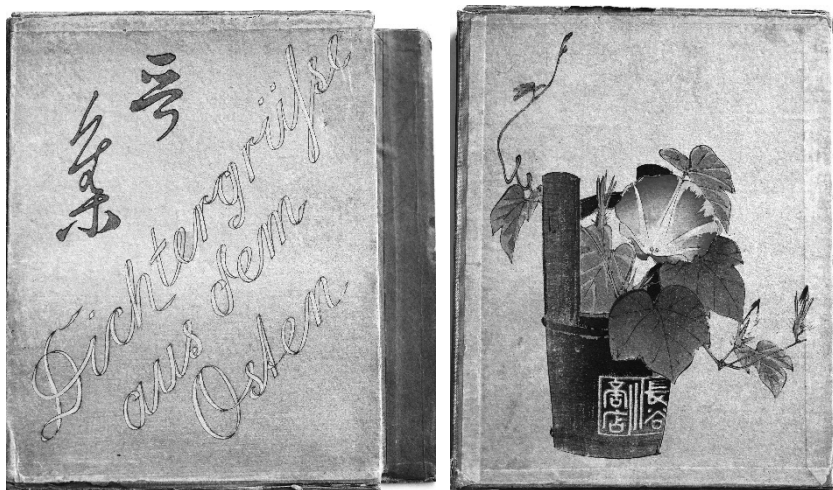
(図2) 『東の国からの詩の挨拶』 (初版) 裏見返し (筆者所蔵)

裏見返しには、左端に「明治廿七年八月十五日印刷同廿日發行／東京市京橋區日吉町十番地／發行者兼繪画印刷者 長谷川武次郎／東京市日本橋區兜町貳番地／東京製紙分社／文字印刷者 斎藤章達」という刊記があり、その右に花瓶に生けた花の挿絵と掛け軸を模した武次郎の英独仏訳『欧文日本昔噺』シリーズ20冊その他の書目広告が掲載されている。裏表紙には瓢箪と蔓がシルエット画法で描かれ、全51丁となっている。

このように初版には、「和歌集」という邦題が付記されており、序文や挿絵および

絵師についての解説は掲載されていなかったことが分かる。第5節で詳しく述べるが、初版の挿絵と後の版の挿絵を比べると、一見ほぼ同じように見えるのだが、注意深く比較検討すると、大きく異なる挿絵が数葉あるほか、人物の顔つきや姿勢、指先といった細かな点に違いを発見出来る箇所がいくつもあることに気がつく。ページの表示方法も、初版ではすでに述べたとおり各ページの上部中央に括弧付きで示されたが、後の版では、右ページにはページ右下に左ページにはページ左下にアラビア数字のみで示す方式に変更となった。

なお、初版にも帙が用意されているが、そのデザインおよび形態は『ちりめん本のすべて』で画像が紹介されているものとは大きく異なっている。初版の帙は、「歌集／Dichtergrüsse／aus dem／Osten」と木彫文字で表した図柄の表面および「長谷川商店」の社名入り手桶に挿した朝顔の図柄の裏面（図3）と、タイトルなどを記した函背の部分ならびに天地と蓋の部分から成っており、全体を覆うことの出来る四方帙である。どの時点から変更されたのかは不明だが、後にこれは周囲をぐるりと巻いて象牙の爪で留めるスタイルの丸帙に変えられた。ちなみに、ドイツでは奉書紙を用いた平紙本が8マルク、「縮緬紙」版が6マルクで販売された。『欧文日本昔噺』シリーズの場合は「縮緬紙」版の方に平紙本よりやや高い価格がつけられていたが、『東の国からの詩の挨拶』においては高級和紙の奉書紙を使用した平紙本の価格を2マルク高くしたものと考えられる。分厚い平紙本は本体自身で自立可能のため帙は準備されなかったようだが、汚れを防ぐ目的で外袋に入れて販売されたようである。放送大学機関リポジトリ Manapio で公開されている『東の国からの詩の挨拶』平紙本第9版（ファイル No.11117568230）では、付属の外袋の外装と外袋に貼られた価格一覧を確認することが出来る⁽¹³⁾。



（図3）『東の国からの詩の挨拶』（初版）帙（筆者所蔵）

『東の国からの詩の挨拶』は、第2節で言及したロイドによって英訳され、*Poetical Greetings from the Far East*（以下、英語版『東の国からの詩の挨拶』）として1896（明治29）年10月に刊行された。ロイドは端書きでフローレンツの独訳に可能な限り忠実な英訳を目指したと述べている。

英語版『東の国からの詩の挨拶』は、白百合女子大学図書館貴重書デジタルアーカイブのちりめん本コレクション（以下、白百合女子大学ちりめん本コレクション）で初版と思われる「縮緬紙」版のデータが公開されているのでこれを参照すると、奥付には「明治廿九年十月一日印刷同月十日發行／發行者 東京市京橋區日吉町十番地／繪畫印刷者 東京市本所區押上町百五十四番地 小宮ヤス／文字印刷者 東京市京橋區築地三丁目十五番地 野村宗十郎」とある。英語版『東の国からの詩の挨拶』の平紙本の存在は確認されていないので、「縮緬紙」版のみが刊行された可能性も考えられる。なお、英語版『東の国からの詩の挨拶』も帙入りで販売されていた。前述した『東の国からの詩の挨拶』初版の帙のデザインではなく、『ちりめん本のすべて』で画像が紹介されている後の版のものと同じデザインで、表記は当然のことだが英語に置き換えられているほか、扇子状の部分には、「英文和歌集／ふろれんつかせ／ほむ（ん）やく／はせ川／發行」と記されている。英語版の帙は非常に珍しいが、放送大学機関リポジトリ Manapio で英語版『東の国からの詩の挨拶』（ファイル No.11116345160）に付属する帙の画像を確認することが出来る。

英語版『東の国からの詩の挨拶』においては、表紙や奥付に版表示を見出すことが出来ないため、どの程度版が重ねられたのか不明だが、国際日本文化研究センター所蔵のもの（資料 ID: 002192276）では奥付の武次郎の住所が上根岸町となっていることから、上根岸町に転居した明治末期以降に刷られたものだと分かる。また、東京女子大学ちりめん本コレクションのもの（電子化 No.0096）には、見返し下部に‘BRENTANO’S, UNION SQUARE, NEW YORK’と記されていることから、英語版はアメリカの出版社への委託販売も行われたと思われる。

ロイドは、ほとんどの詩歌においてフローレンツが用いた表現を尊重し、行数も基本的には同数となるよう配慮して脚韻を踏んだ英詩形を目指したように見えるが、一部の詩歌では大胆な簡略化も行っている。最も顕著な例は外山正一の「忘れがたみ」の場合で、フローレンツの独訳が18ページに及ぶのに対し、ロイドの英訳は16ページに短縮されているため、挿絵の配置が変更されている。

「忘れがたみ」の英訳が2ページ分少なくなったことによって総ページ数も変わってくるはずだが、末尾に置かれた「桶狭懐古」の最終ページはドイツ語版でも英語版でも96ページとなっている。これは、ドイツ語版と英語版で微妙にページの付け方を変えたことによって可能になったもので、ドイツ語版では序文を3ページとしてペー

ジ表示を始めているのに対し、英語版では序文を5ページとしている。

英語版の挿絵はドイツ語版の後の版のものと前述の「忘れがたみ」の部分を除いて同じであるため、英語版を準備する際にドイツ語版『東の国からの詩の挨拶』にも序文や挿絵などの解説が追加され、挿絵の一部描き換えなどが行われたのではないかと推察される。英語版に掲載されたフローレンツの序文には‘Tokyo, January, 1896.’（〔東京、1896年1月〕）と記されているのだが、ドイツ語版の序文ではこれが統一されていない。第4版では‘Tōkyō, im Herbst, 1896.’（〔東京、1896年秋〕）、第7版ならびに第8版には‘Tōkyō, im Januar, 1896.’（〔東京、1896年1月〕）となっているうえに、第9版以降では削除されている。第2版と第3版は未見のため、ドイツ語版のどの版から序文の追加などが行われたのか不明だが、序文が英語版刊行に合わせて準備されたために「1896」年執筆という表示になったことは確かだろう。ちなみに、『長谷川武次郎出版目録』からは、ドイツ語版も英語版も共に2ドル50セントで販売されたことが分かる。

佐藤マサ子は『東の国からの詩の挨拶』が広く受容された証として1912（大正元年）刊行の第14版に言及しているが（佐藤マサ子、1995年、218ページ）、放送大学附属図書館と早稲田大学中央図書館には『東の国からの詩の挨拶』「縮緬紙」版の第15版が所蔵されている。放送大学附属図書館所蔵の第15版（ファイル No.1111851514）を放送大学機関リポジトリ Manapio で確認すると、表紙に FUNFZEHNTE TAUSEND（〔第15版〕）と印刷され、裏見返しの奥付には、「明治二十七年八月二十日第一版発行／大正三年四月十日第十五版印刷／同 同 二十日第十五版発行」とあり、発行者は「東京市下谷區上根岸町十七番地」の長谷川武次郎、印刷者は「同市同區同町百七番地」の金子徳次郎となっている。

以上により、『東の国からの詩の挨拶』は平紙本も「縮緬紙」版も共に初版の刊行日は1894（明治27）年8月20日としてよいと思われる。英語版が刊行された1896（明治29）年10月以降に序などの追加と挿絵の一部修正が行われた。発行者は武次郎で活字の印刷を請け負った印刷者は第7版までは製紙分社の斎藤章達であったが、第8版以降は金子徳次郎に変更となった。武次郎が上根岸町に転居した際に金子徳次郎も同じ町内に移っていることから、彼は武次郎専属の印刷業者のように活躍したものと思われる。また、少なくとも1914（大正3）年4月まで『東の国からの詩の挨拶』が版を重ね続けたことが明らかである。

シャーフは、『東の国からの詩の挨拶』の増刷はアーメランク社が千部単位で注文したと述べている（Sharf, 1994年、23ページ）。木版印刷では1枚の版木から刷ることが出来るのは「多くて二千から三千位が關の山です」という武次郎の証言（長谷川、1914年、27ページ）が残されているが、第15版までが確認出来る「縮緬紙」版

『東の国からの詩の挨拶』は少なくとも15,000部が刊行された計算となる。平紙本も同じく千部単位で刷られたのであれば、第9版まで確認出来るので、9,000部は刊行されたことになる。各版の挿絵を見比べていくと小さな差異があちこちに見つかることから、何度も新たに版木が彫られたものと推察される。

4. 『東の国からの詩の挨拶』に見られるチェンバレンの影響

『東の国からの詩の挨拶』は、日本詩歌の初のドイツ語訳詞華集ではない。1872（明治5）年にアウグスト・プフィッツマイヤー（August Pfizmaier, 1808-1887）がすでに『万葉集』からの216首をドイツ語に訳出した詞華集をドイツで刊行しており、これが日本詩歌の最初の欧文訳でもあった。言語学的な観点から『万葉集』作品を分析しようと試みたプフィッツマイヤーの翻訳は「極めて直訳的」（フィットレル、2022年、81ページ）であった。これに対し、フローレンツは『万葉集』だけではなく『古今和歌集』からの詩歌や明治期の新体詩をも含めたさまざまな詩歌を選び、西洋の読者が理解しやすい韻文形式で訳出したのだった。

管見では、これまでフローレンツがどのように『万葉集』や『古今和歌集』から訳出対象の詩歌を選び出したのかという点が議論されたことはなく、1880（明治13）年にチェンバレンが『万葉集』と『古今和歌集』からの詩歌および『羽衣』などの謡曲4曲と狂言2曲を英訳し、ロンドンのTrübner & Co.という出版社からTrübner's Oriental Seriesという学術叢書⁽¹⁴⁾の1冊として*The Classical Poetry of the Japanese*という詞華集を刊行していたことも等閑視されてきたように思われる。

*The Classical Poetry of the Japanese*は227ページに及ぶ大著で、緒言では賀茂真淵（1697-1769）、本居宣長（1730-1801）、尾崎雅嘉（1755-1827）といった国学者による参考文献24冊が挙げられているほか、チェンバレンに『万葉集』などの古典から謡曲までの幅広い知識を授けた鈴木庸正^{つねまさ}（生没年不詳）と和歌の指導をした橘東世子^{とせこ}（1806-1882）に謝辞が捧げられている。同書は1987（昭和62）年に川村ハツエによって翻訳され、『日本人の古典詩歌』として七月堂から刊行されているので、これを参照しつつ58編の訳詩からなる『東の国からの詩の挨拶』の内容を検討したところ、なんと半数に当たる29編はチェンバレンが*The Classical Poetry of the Japanese*（以下、『日本人の古典詩歌』）で英訳した詩歌と重なることが判明した⁽¹⁵⁾。フローレンツは『東の国からの詩の挨拶』の序文でもその他の場面でもチェンバレンの『日本人の古典詩歌』について全く言及していないが、同書を参照していることは明らかである。『東の国からの詩の挨拶』はチェンバレンの多大な影響力のもとに成立したと

いって過言ではないだろう。

フローレンツは来日当初から『万葉集』に関心を寄せて研究を始め、1891（明治24）年秋からは教え子の大学院生・藤代禎輔の協力のもとに『万葉集』の詩歌の独訳を着々と進めていた。フローレンツの依頼により藤代は『万葉集』研究の大家・木村正辞（1827-1913）の授業に出席して『万葉集』を学び、その内容をフローレンツに伝えると共に独訳の手助けをしたという（佐藤マサ子、1995年、211ページ）。フローレンツは西洋の詩歌や中国の漢詩とは異なる魅力を『万葉集』や『古今和歌集』に発見し、研究に励んだわけだが、来日からわずか6年という時点で日本詩歌の訳詩集を編むにあたっては、大先輩であるチェンバレンの著作を参照し、その手腕から素直に学ぶという方針を取らざるを得なかったものと考えられる。『万葉集』だけを考えても、全20巻に収められた4500余首という膨大な詩歌の中から外国人読者の共感を期待できるものを選び出すという作業が困難を極めることは想像に難くない。フローレンツは『日本人の古典詩歌』に選び取られた詩歌の多くに価値を見出し、これらを自身の詞華集の中心に据えることにしたものと推察される。

それでは、フローレンツが何をチェンバレンの『日本人の古典詩歌』から引き継いだのか、またフローレンツが独自に加えたものはどんなものだったかを見ていきたい。『日本人の古典詩歌』では、『万葉集』からの詩歌を‘Ballads’（「バラード」）、‘Love Songs’（「相聞歌」）、‘Elegies’（「挽歌」）、‘Miscellaneous Poems’（「雑歌」）の4部に分けて計66編をタイトルをつけたうえで英訳しているほか、『古今和歌集』の短歌50首を「春歌」、「夏歌」、「秋歌」、「冬歌」、「賀歌」、「離別歌」、「羈旅歌」、「物名歌」、「恋歌」、「哀傷歌」、「雑歌」、「雑体」の12種に分けて英訳している。

これに対し、『東の国からの詩の挨拶』は6部構成で、I. Herzblätter:（「いとしい者へ」）に22編、II. Naturgenuss:（「自然讃歌」）に12編、III. Ernst des Lebens:（「人生の厳しさ」）に6編、IV. Höfische Dichtung:（「宮廷詩」）に4編、V. Bunte Blätter:（「さまざまな詩」）に11編、VI. Anläufe zur Epik:（「叙事詩の試み」）に3編の計58編の訳詩から成り、すべてにタイトルがつけられている。目次に掲載されているのは57編だが、IV部の1編が目次からは欠落しているため、合わせて58編となる。最もページ数が多いのがI部で、これにVI部、II部、V部、IV部、III部の順で続く。フローレンツは、I部からV部までは『万葉集』と『古今和歌集』を中心に詩歌を選び、VI部では『万葉集』からの長歌ならびに反歌各1編に加え、同時代の外山正一と中村秋香（1841-1914）の作品を訳出している。『万葉集』からの詩歌の翻訳が最も多く、全体で41首が採られている。

フローレンツは、チェンバレンと同じ構成は取らず、前述のような6つの部ごとに『万葉集』からの訳詩と『古今和歌集』からの訳詩を取り交えて並べるという構

成にした。I部の冒頭に置かれたのは、‘Klage des Dichters Okura über den Tod seines Sohnes.’（『詩人憶良が息子の死を悼んだ挽歌』）で（Manyōshū 5, Verfasser Okura）（『万葉集』巻5、作者憶良）と付記されている。これは、チェンバレンが‘Elegy on the Poet’s Son Furubi.’（『詩人の幼児古日を失った時の挽歌と反歌』）として訳出し、「挽歌」の部の中ほどに置いたものであった。どちらも『万葉集』巻5の904番の長歌とこれに続く反歌905番を訳出したものである。現在では、山上憶良（660?-733?、以下、憶良）による、夭折した子どもの「父親の立場に立つての代作歌」（中西、2012年、162ページ）とみなされているが、チェンバレンもフローレンツも憶良が自身の息子の死を悼んで詠んだ歌と解釈したようである。チェンバレンが古日ではなく、‘Furubi’としたのをフローレンツも踏襲し、同じように長歌を4行詩9連、反歌を4行詩1連で訳出しているが、フローレンツは敢えてチェンバレンとは異なる表現を試みたようで、チェンバレンの英訳からの重訳にはなっていない。ちなみに、チェンバレンは『日本人の古典詩歌』において、『古今和歌集』からの訳詩には分類名と歌番号を付記しているが、『万葉集』からのものに対しては何も示していない。フローレンツが巻数をタイトルと共に示しているという事実からは、フローレンツが『日本人の古典詩歌』だけをたよりに翻訳作業を進めたのではないことが分かる。

I部の2番目に置かれたのは、同じく憶良の有名な「^{しろかねくがね}銀も金も玉も何せむに^{まさ}優れる宝子にしかめやも」（『万葉集』巻5の803番）を‘Höchster Vaterstolz’（『至高の父親の誇り』）と題して4行詩に訳出したものである。これは802番の長歌「瓜食めば子ども思ほゆ…」の反歌にあたるが、チェンバレンは『日本人の古典詩歌』で長歌を7行詩、反歌を4行詩として訳出していた。フローレンツは長歌を省略し、反歌のみを扱ったわけである。チェンバレンの英訳とフローレンツの独訳を英語にしたロイドの訳を並べてみると次のようになる。

What use to me the gold and silver hoard?
 What use to me the gems most rich and rare?
 Brighter by far, ——ay! Bright beyond compare, ——
 The joys my children to my heart afford! (Basil Hall Chamberlain)

What, to me, are diamond treasures?
 Silver, gold, or copper pure?
 Far nobler joys, far higher pleasures,
 My boys and girls for me procure. (Arthur Lloyd)

ロイド訳は重訳となるわけだが、チェンバレンの表現に比べると直接的な表現を用いて簡潔にまとめられているように感じられる。I部に採られた億良の作品は、これらの3首となっている。

I部で最も多く扱われているのは『万葉集』巻13からの詩歌で、計14首に及んでいる。長歌を主とする巻13には問答歌が18首収められているが、そのうちの4首をチェンバレンは2首ずつまとめ、‘He and She.’（「彼と彼女」）と‘Husband and Wife.’（「夫と妻」）と題したふたつの詩に仕立て直して訳出している。前者は天皇の妻問いの歌とされる長歌3310番とそれに答えた泊瀬娘子の長歌3312番の組み合わせで、男性の問いかけに対する女性の返答をまとめた詩歌としてチェンバレンは8行詩2連に訳出しているが、フローレンツはタイトルを‘Heimliche Liebe.’（「秘密の恋」）に変更してはいるものの、同じ組み合わせの2首を同じく8行詩2連に訳出している。後者は、長歌3314番と反歌3317番の組み合わせで、馬を買うよう夫に勧める妻に対し夫が反論するという内容をチェンバレンは4行詩4連で訳出しているが、フローレンツは同じタイトル‘Mann und Frau.’（「夫と妻」）を用いて同じく4行詩4連に訳出している。チェンバレンはこれらふたつの訳詩を「相聞歌」の部に並べているが、親子の愛情を謳ったものから夫婦間の愛情を扱った作品、そして恋する人への思いを込めた作品というおおよその流れに沿って22編の訳詩をI部に並べたフローレンツは、前者を17番目、後者を5番目に配置している。ふたつの歌をひとまとめにして訳出するというチェンバレン独自の手法をフローレンツがそのまま用いたという事実からも、チェンバレンの『日本人の古典詩歌』への依存度が高いことが明白といえるだろう。

『万葉集』巻13から採られた残り10首の詩歌のうち、6首は『日本人の古典詩歌』でチェンバレンが訳出した長歌にあたる。フローレンツが自ら選び出したと思われる3248番の長歌と3249番の反歌は合わせて‘Der Einzige.’（「あなただけ」）というタイトルのもとで4行詩3連に訳出されている。フローレンツは残る2首、長歌3280番には‘Erwartung.’（「期待」）、長歌3270番には‘Zornige Eifersucht.’（「激しい嫉妬」）というタイトルをつけて訳出している。

I部には『日本人の古典詩歌』に依拠した作品が最も多く見られ、22編の訳詩のうちのなんと15編がチェンバレンの訳詩と重なっているため、『日本人の古典詩歌』の影響が最も強いといえるだろう。しかしながら、前述したとおり、チェンバレンの英訳からは出来る限り距離を置こうという配慮が見受けられるほか、詩歌の配列に気を配り、さらに神楽からという‘Schifferlied.’（「水夫の歌」）や現代のものからという‘Volkstümliches Liebeslied.’（「大衆的な恋の歌」）なども合わせて収めて多様性をもたせようとした工夫が見受けられる。

II部の12編はいずれも季節の移り変わりや山や滝といった自然の美しさを謳ったも

のだが、『万葉集』からの6首および『古今和歌集』からの3首が訳出されている一方、全く出典に言及のないものが2編含まれている。12編のうちの半数の6編が『日本人の古典詩歌』からのものに当たる。I部に比べると短歌の割合が高く、冒頭には『古今和歌集』巻1の二条のきさきが謳ったという4番「雪のうちに春はきにけり鶯のこほれる涙いまよとくらん」が‘Frühlingsahnung.’（[[春の予感]]）と題して6行詩に訳出されて置かれているが、これも『日本人の古典詩歌』でチェンバレンが『古今和歌集』「春」の部の冒頭で4行詩として訳出したものである。

特筆すべきは、荒木田守武（1473-1549）の俳句「落花枝にかへると見れば胡蝶かな」が‘Augentäuschung’（[[目の錯覚]]）という題のもとに5行詩として訳出されていることである。これは、俳句が初めてドイツ語に訳された例とみなされている（宮内、2019年、139-141ページ）。なお、百人一首のひとつになっている、後徳大寺（藤原）実定（1139-1191）の「ほととぎす鳴きつる方を眺むればただ有明の月ぞ残れる」も‘Kukuklied.’（[[かっこうの歌声]]）と題して訳出されている。これらの2編は『日本人の古典詩歌』には見られない作品で、フローレンツがどこからこれらを採歌したかは不明である。

Ⅲ部の6編は『万葉集』からの3編と『古今和歌集』からの3編から成るが、このうちの5編が『日本人の古典詩歌』からのものである。冒頭の1編は、「世間の無常を悲しみし歌一首」という題詞に続く大伴家持（718?-785）の『万葉集』巻19の長歌4160番を‘Unbestand alles Irdischen.’（[[不安定なすべての無常]]）として4行詩5連に訳出したものである。これはチェンバレンが『日本人の古典詩歌』で「雑歌」（『万葉集』）の部の最後の方に‘Lament on the Mutability of all Earthly Things.’（「世間の無常を悲しむ歌」）としてやはり4行詩5連で訳出したものである。これに続く‘Vergänglichkeit.’（[[無常]]）は『万葉集』巻13の長歌3332番「高山と海とこそば山ながらかくも現しく海ながらしか真ならめ人は花物そうつせみ世人」を7行詩に訳出したものだが、チェンバレンも『日本人の古典詩歌』で「雑歌」（『万葉集』）の部の中ほどでこれを‘A Very Ancient Ode.’（「非常に古い歌」）として8行詩に訳出している⁽¹⁶⁾。同様に無常を謳った2編、億良が老年の淋しさを謳った『万葉集』巻5の長歌804番を訳出したものが続き、最後に『古今和歌集』巻17の895番「老いらくの来むと知りせば門さして無しとこたへてあはざらましを」が‘Der unwillkommene Gast’（[[招かれざる客]]）と題してユーモラスな6行詩に訳出されている。チェンバレンはこれも『日本人の古典詩歌』で「雑歌」（『古今和歌集』）の部において4行詩に訳出している。

Ⅳ部の4編は、すべて『万葉集』からのものである。冒頭に置かれた巻13の長歌3245番「天橋も長くもがも高山も高くもがも月読の持てるをち水い取り来て君に奉り

てをち得てしかも」は‘Jungwasser für den Kaiser’（「天皇に献上する若返りの水」）という題で8行詩に訳出されているが、これもチェンバレンが『日本人の古典詩歌』の「雑歌」（『万葉集』）の部で‘The Bridge to Heaven.’（「天への橋」）として8行詩に訳出したものである。他の3編は『日本人の古典詩歌』では扱われなかったものである。Ⅳ部の4編はいずれも天皇を讃え、世の繁栄を願う歌となっている。

Ⅴ部には、11編の短い訳詩が収められている。冒頭の‘Das trügerische Lotosblatt’（「見せかけの蓮の葉」）は『古今和歌集』巻3の165番、僧正編昭（816-890）による「蓮葉のはちすぼにごりにしまぬ心もてなにかは露をたまとあざむく」を訳出したものである。チェンバレンは『日本人の古典詩歌』において『古今和歌集』の「夏歌」を2首訳出しているが、そのうちのひとつがこの165番である。11編のうち、『日本人の古典詩歌』に収められていたのはこれだけで残りの10編はフローレンツが独自に選び出したものだが、出典情報が付記されていないものが多いうえ、催馬楽からという1編や和泉式部、去来、北枝と作者名のみ付記したものが各1編含まれている。6番目の‘Ohnmacht’（「無力さ」）は和泉式部（977?-没年不詳）の『玉葉和歌集』巻18の「いかにせんいかにかすへき世中をそむけはかなしすめはうらめし」を訳出したものと思われる。10番目に置かれた‘Falsche Abhülfe’（「偽の救済策」）というユーモラスな題のもとに訳出されたのは、立花北枝（生年不詳-1718）の俳句「田を売ていとど寝られぬ蛙かな」ではないかと思われる。向井去来（1651-1704）の作とされる‘Frau und Nebenfrau’（「妻と妾」）は、どの俳句を訳出したものか特定することは出来なかった。さまざまな時代の短歌や俳句から幅広い主題の作品を選び出して訳出したⅤ部は、『東の国からの詩の挨拶』において最もフローレンツの独自性が現れた部分だと考えられる。

最後のⅥ部には、3編の物語詩が収められている。冒頭には、『万葉集』巻9の「水江の浦みずのえの島子しまこを詠みし一首」という題詞に続いて浦島伝説を謳った高橋虫麻呂（生没年不詳）の長歌1740番および反歌1741番が‘Jung Urashima der Fischer’（「若き漁師浦島」）と題して訳出されている。チェンバレンはこれらを‘The Fisher Boy Urashima’（「浦島の子」）として4行詩15連で訳出し、『日本人の古典詩歌』の「バラード」部の冒頭に置いた。『日本人の古典詩歌』刊行から6年後の1886（明治19）年には、『欧文日本昔噺』シリーズの第8号としてチェンバレンの英訳による『浦島』が出ている。長歌では「浦の島子」とされている主人公をチェンバレンは‘Urashima’としたが、フローレンツもこれを踏襲している。

2番目と3番目は明治期の作品の翻訳である。『万葉集』の物語詩からいきなり明治期の作品に移るわけだが、江戸時代の天災と戦国時代の合戦を謳った新体詩を配列することによって日本詩歌における〈叙事詩〉の多様性を示そうとフローレンツは考

えたのかもしれない。また、これらの詩歌を加えることによって、チェンバレンの『日本人の古典詩歌』とは異なる側面を打ち出そうとしたともいえるだろう。

2番目の‘Erinnerung an das Erdbeben vom 2. Oktober 1855’（『1855年10月2日の地震の思い出』）は、外山正一が幼児期に体験した安政江戸地震を謳った新体詩「忘れがたみ」を訳出したものである⁽¹⁷⁾。「忘れがたみ」は1891（明治24）年8月に『東洋學藝雑誌』第8編119号に掲載された。3番目の‘Nächtlicher Ueberfall bei Okehazama’（『桶狭の夜の奇襲』）は中村秋香の長歌「桶狭懐古」を訳出したものである。戦国時代の織田信長軍と今川義元軍の合戦を謳ったこの作品も1891（明治24）年7月に『東洋學藝雑誌』第8編118号に発表されている。これは「桶狭」と改題されて『明治会叢誌』第54号（1893年）に掲載されたほか、『東の国からの詩の挨拶』刊行後のことになるが、「忘れがたみ」と共に『新體詩歌集』（大日本図書、1895年）に収められた。なお、外山の「忘れがたみ」と中村の「桶狭懐古」の独訳は、OAG例会で発表され、1892（明治25）年3月刊行のMOAGに掲載されたフローレンツの‘Zur Japanischen Literatur der Gegenwart’（『現代日本文学について』）と題する論稿で紹介されていた。

『東の国からの詩の挨拶』の概要をチェンバレンの『日本人の古典詩歌』との関連において概説したが、所収された58編について、『万葉集』からのものについては井上さやか⁽¹⁸⁾の先行研究（井上さやか、2010年、30-31ページ）と川村ハツエが『日本人の古典詩歌』において示した歌番号を参照し、その他についてはフローレンツが付記した出典情報とドイツ語訳の中に見出される地名などのキーワードを頼りに調査したところ、フローレンツが翻訳対象とした詩歌を8割以上特定することが出来た。ドイツ語タイトル、出典および歌番号、作者など、現時点で判明した限りの情報を【表1】『東の国からの詩の挨拶』所収詩歌内容一覧』としてまとめた。

5. 『東の国からの詩の挨拶』の挿絵について

武次郎が初めて手掛けた詞華集形式のちりめん本の制作は、1890（明治23）年に刊行されたポストウィックの *Oyucha san*（『おゆちやさん』）である。翌年、同様の形式の *Japanese Jingles*（『日本の小唄』、以下、『日本の小唄』）が出たが、『日本の小唄』においては、袋綴じであるにもかかわらず、見開きページを画帖仕立て⁽¹⁸⁾ かのように見せる巧妙な印刷ならびに製本上の工夫が導入された。匡郭を設けず、見開き大のスペースを最大限に活かす方法を採用して、挿絵の中に詩歌部分をはめ込むようなレイアウトなどを可能にしたのである。『東の国からの詩の挨拶』においても、こ

【表1】『東の国からの詩の挨拶』所収詩歌内容一覧

部	No.	タイトル (INHALT(目次)より)*	チェ	出典	歌番号	作者	備考
I	1	Klage des Dichters Okura über den Tod seines Sohnes.	○	万5	904~5	山上憶良	雑歌
	2	Höchster Vaterstolz.	○	万5	803	山上憶良	雑歌
	3	Mutterliebe.	○	万19	4220~1	大伴坂上郎女	
	4	Schifferlied.		神楽	—	—	未特定
	5	Mann und Frau.	○	万13	3314/3317	未詳	問答歌
	6	Blumentrost.	○	万18	4113~5	大伴家持	万15は誤記
	7	Die Perlen von Susu.	○	万18	4101	大伴家持	
	8	Der Einzige.		万13	3248~9	未詳	相聞歌
	9	Keine Nachricht.	○	万13	3258	未詳	相聞歌
	10	Erwartung.		万13	3280	未詳	相聞歌
	11	Liebesgeheimnis.	○	万13	3255	未詳	相聞歌
	12	Sehnsucht.		万13	3224	未詳	雑歌
	13	Abend-Orakel.	○	万13	3289	未詳	相聞歌
	14	Volkstümliches Liebeslied.		—	—	—	現代
	15	Endlose Liebe.	○	万13	3293	未詳	相聞歌
	16	Das Mädchen und ihr Hund.	○	万13	3278	未詳	相聞歌
	17	Heimliche Liebe.	○	万13	3310/3312	未詳	問答歌
	18	Treues Gedenken.		—	—	—	未特定
	19	Vergesslichkeit.	○	古15	802	素性法師	恋歌
	20	Vanitas Vanitatum.	○	古11	522	未詳	恋歌
	21	Zornige Eifersucht.		万13	3270	未詳	相聞歌
	22	Mädchen ohne Begleitung.	○	万9	1742	未詳	雑歌
II	1	Frühlingsahnung.	○	古1	4	二条のきさき	春歌
	2	Frühlingsankunft.	○	万13	3221	未詳	雑歌
	3	Frühling und Herbst.	○	万1	16	額田王	雑歌
	4	Die vier Jahreszeiten.		—	—	—	未特定
	5	Kukuks Erwartung.	○	万19	4209	掾久米広縄	
	6	Kukukslied.		千載	夏161	実定	後徳大寺
	7	Mondnacht.		—	—	—	未特定
	8	Augentäuschung.		—	—	荒木田守武	
	9	Der Berg Mimoro.		万13	3222	未詳	雑歌
	10	An den Wasserfall von Otoha.	○	古17	928	壬生忠岑	雑歌
	11	Der Wasserfall von Yoshinu.		万13	3232~3	未詳	Yoshino
	12	Die Regenwolke.	○	万18	4122	大伴家持	

III	1	Unbestand alles Irdischen.	○	万19	4160	大伴家持	
	2	Vergänglichkeit.	○	万13	3332	未詳	挽歌
	3	Ein Gleiches(2 Gedichte). **	○	古16	851	紀貫之	哀傷歌
	4	Ein Gleiches.	○	古16	859	大江千里	哀傷歌
	5	Menschenleben.		万5	804	山上憶良	雑歌
	6	Der unwillkommene Gast.	○	古17	895	未詳	雑歌
IV	1	Jungwasser für den Kaiser.	○	万13	3245	未詳	雑歌
	2	[Dem Greisen Fürsten. I. II.] *		万13	3246	未詳	雑歌
	3	Am Brunnen zu Ishi.		万13	3234~5	未詳	雑歌
	4	Treue Wünsche für den Kaiser.		万6	1053	田辺福麻呂	雑歌
V	1	Das trügerische Lotosblatt.	○	古3	165	僧正遍昭	夏歌
	2	Schwanengesang eines sterbenden Dichters.		—	—	—	未特定
	3	Volkstümliches Trinklied.		催馬楽	—	—	未特定
	4	Auf einen abgenutzten Besen.		—	—	—	未特定
	5	Tiefe Wasser rauschen nicht.		古14	722	素性法師	恋歌
	6	Ohnmacht.		玉葉	2546	和泉式部	
	7	Verführung.		—	—	—	未特定
	8	Rechenschaft.		古	—	—	未特定
	9	Frau und Nebenfrau.		—	—	去来	未特定
	10	Falsche Abhülfe.		—	—	北枝	
	11	Der misverstandene Konfucius.		—	—	—	未特定
VI	1	Jung Urashima der Fischer.	○	万9	1740~1	高橋虫麻呂	雑歌
	2	Erinnerung an das Erdbeben vom 2.Oktober 1855.		東	—	外山正一	[忘れがたみ]
	3	Nächtlicher Ueberfall bei Okehazama.		東	—	中村秋香	[桶狭懐古]

チェ：チェンバレンの *The Classical Poetry of the Japanese* (1880) に所収されていた詩歌 万：『万葉集』
古：『古今和歌集』 数字：巻数 東：『東洋學藝雑誌』 未詳：読み人知らず —：不明 未特定：対象未特定
*：IV部の2番目に置かれた詩歌のタイトル [Dem Greisen Fürsten. I. II.] は目次には掲載されていないため、本文より補った。なお、目次のタイトルと本文中のタイトルは異なる場合もある。
**：タイトルに 2 Gedichte ((詩2編)) とあるが、前半は『古今和歌集』巻16の紀貫之作851番、後半の1首は未特定。

れと同じ方法が採られ、匡郭に縛られない自由なレイアウトが展開されている。しかしながら、『日本の小唄』に見られる、空間を最大限に生かした大胆な挿絵は『東の国からの詩の挨拶』にはあまり見ることが出来ず、多くの挿絵は日本画の伝統的技法にのっとった無難な構図のものに終始している印象を受ける。

後の版から掲載されるようになった巻末の挿絵についての解説から、『東の国から

の詩の挨拶』では誰が何を描いたのかが明らかにされている。表紙を描いた三島蕉窓（1852-1914、以下、蕉窓）をはじめとして、鈴木華邨（1860-1919、以下、華邨）、新井芳宗（1863-1941、別称2代目歌川芳宗、以下、芳宗）、梶田半古（1870-1917、以下、半古）、枝貞彦（生没年不詳、以下、貞彦）ならびにひとりの無名の絵師⁽¹⁹⁾、計6名の絵師が分担制で挿絵を受け持ったことが分かる。全体の半数近い挿絵を描いたのは蕉窓であり、残りの半数を華邨と芳宗が分け合って描き、半古と貞彦による挿絵はごくわずかである。

多くの挿絵のうち、最も斬新で印象深いものは蕉窓が描いた表紙ではないだろうか。上部右手に富士山、上部左手からその山頂を目指す昇り龍が描かれた表紙は、非常にインパクトが強いものとなっている。表紙の下部には裾野の山並みと海に浮かぶ帆掛け舟5隻が描かれているが、前方の2隻の帆には、‘C. F. AMELANG LEIPZIG’とアーメランク社の名がさりげなく記されている⁽²⁰⁾。表紙のデザインにフローレンツの希望が反映されたのかどうかは不明だが、日本を代表する風景としての富士山に龍を合わせることによって、東洋の神秘性を強調しようとしたのかもしれない。

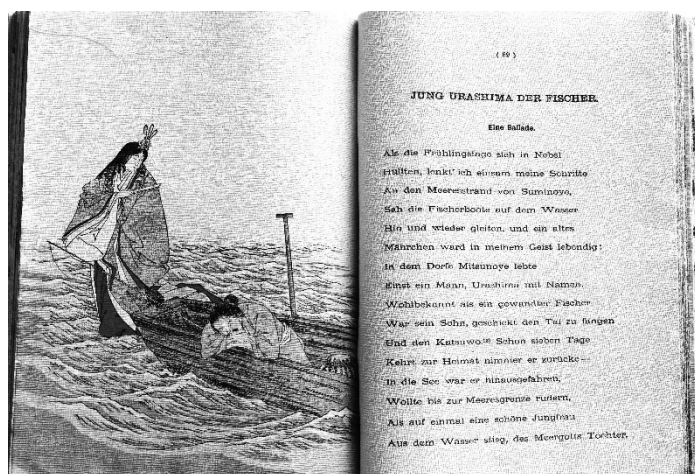
蕉窓にとって龍は得意な図象のひとつであったらしく、1886（明治19）年の第2回鑑画会には「子母龍」と題する作品を出品して賞状を授与されている（佐藤道信、1987年、197ページ）ほか、1907（明治40）年に画帖仕立ての豪華版ちりめん本として刊行された詞華集 *Sword & Blossom Poems*（『刀と桜』）第1巻にも龍の挿絵を描いている。『東の国からの詩の挨拶』の表紙を任された蕉窓は、得意な画題で好機に挑んだのかもしれない。

富士山の前景に海と帆掛け舟が描かれた構図は、歌川広重（1797-1858）の富士三十六景のひとつ「駿河三保之松原」に見られるほか、3代目広重（1842-1894）による「横濱海岸フランス役館景」⁽²¹⁾にも見出すことが出来るので、当時のありふれた風景であったものと思われる。ちなみに、手前に小さく描かれた帆掛け舟は、『欧文日本昔噺』シリーズの『桃太郎』で小林永濯（1843-1890、以下、永濯）が描いた、鬼ヶ島から宝を積んで戻る舟とよく似ている。

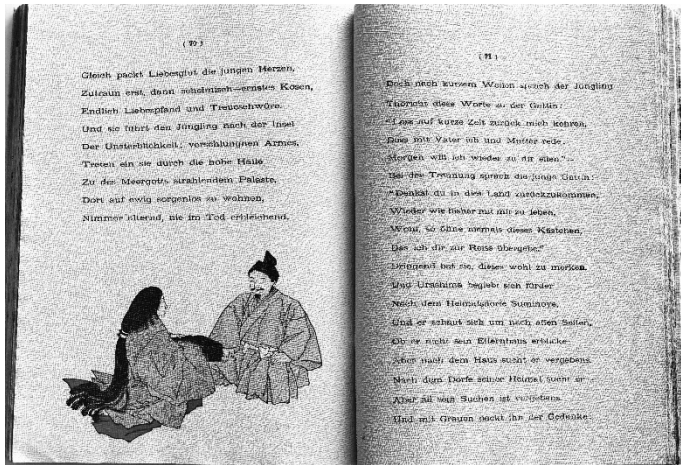
それぞれの詩歌には、内容に即した風景や植物などが描かれているが、いずれも基本的に日本画の伝統にのっとった挿絵となっているため、日本人読者にとっては馴染み深い、既視感のある挿絵のように感じられるものが多い。しかしながら、ジャポニスム到来によって日本美術に高い関心を向けていた当時の西洋の読者にとっては、『東の国からの詩の挨拶』に添えられた日本の風景や花々、着物を身につけた人々などを色鮮やかに描いたさまざまな挿絵は、異国情緒溢れた、新鮮で印象深いものに映ったに違いない。

長詩3編を収めたⅥ部の挿絵はほとんどが華邨によって描かれたが、冒頭の‘Jung

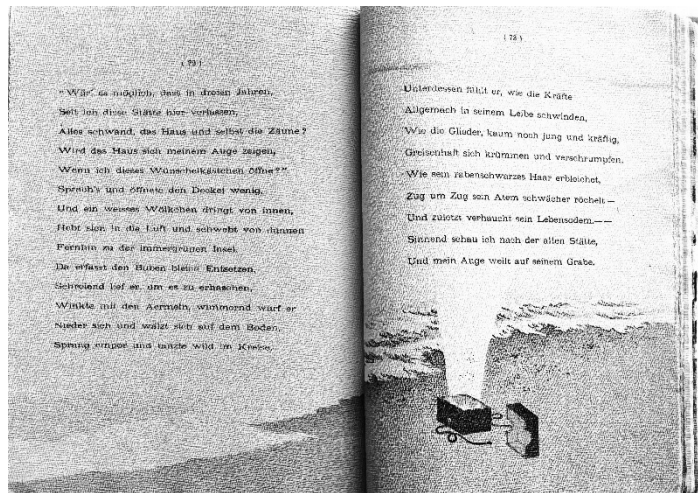
Urashima der Fischer' (『若き漁師浦島』) の挿絵は、初版と後の版では大きく異なっていることを指摘しておきたい。初版には、小舟のへりに顎をのせて眠る浦島とその傍らの波間に立つ海神の娘の挿絵 [1] (図4)、娘が浦島に玉手箱を渡す挿絵 [2] (図5)、蓋の開いた玉手箱と立ち上る煙を描いた海辺の挿絵 [3] (図6) の3葉が描かれているのだが、挿絵 [1] と挿絵 [2] は『欧文日本昔噺』シリーズ『浦島』の4丁オモテならびに9丁オモテの永濯の挿絵にそれぞれ酷似している。挿絵 [3] は永濯の12丁ウラならびに13丁オモテの見開きの挿絵から老人と化した浦島の姿を削除したもの、つまり海辺の構図と玉手箱のみ永濯の絵を模したものとなっている。これらは、後の版では次のように描き換えられた。挿絵 [1] は見開き大のものとなり、左ページに真っすぐに立つ海神の娘、右ページに小舟で眠る浦島を描いた横長の挿絵に、挿絵 [2] もまた見開き大となり、相對するふたりの周囲に欄干や屏風、屋根や柱を描き加えた立体的な構図に変わり、着物を身に纏った魚たちも添えられた。挿絵 [3] は見開き大のままだが、波をより丁寧を描き、老人となった浦島が描き加えられた結果、『欧文日本昔噺』『浦島』の12丁ウラならびに13丁オモテの永濯の挿絵に酷似したものとなった。これらの変更がフローレンツの希望によって行われたかどうかは不明だが、初版においても、後の版においても、これらの挿絵に関しては、華邨が永濯の挿絵を模倣したことに間違いはない。しかしながら、著作権が確立されていなかった当時の感覚としては、永濯へのオマージュとして好意的に受け入れられたのかもしれない。



(図4) 『若き漁師浦島』(初版) 挿絵 [1] 〈華邨〉(筆者所蔵)



(図5) 「若き漁師浦島」(初版)挿絵 [2] 〈華邨〉(筆者所蔵)



(図6) 「若き漁師浦島」(初版)挿絵 [3] 〈華邨〉(筆者所蔵)

それにしても、全58編の異なる内容の詩歌の挿絵を準備するのは、骨の折れる仕事であったに違いない。武次郎が描くべき題材を指示し、各絵師はそれに従ったものと想像するが、歌に謳われていない種類の花が描かれているなどの小さな齟齬も散見されることから、『欧文日本昔噺』シリーズの場合とは異なるコミュニケーション上の困難があったと思われる。石澤小枝子は『万葉集』の詩歌に江戸時代の装束の人物画が添えられている問題を指摘しているが(石澤、2004年、158ページ)、菊池容斎(1788-1878)による『前賢故実』全10巻などの参考資料があったとはいえ、中世の人々の風俗は明治期の絵師たちにとって扱いにくい題材であったに違いない。永濯亡きあとの大仕事を、複数の絵師に同時進行で挿絵を描かせることによって武次郎はどうか完成させた。フローレンツが序文で見事な仕上がりに感謝の意を武次郎に捧げ

ていることから、武次郎がこの困難な仕事に情熱をもってあたり、フローレンツもそれに満足したものと思われる。

6. 『孝女白菊の詩』の刊行

『東の国からの詩の挨拶』が刊行された翌年、1895（明治28）年9月には、*Japanische Dichtungen Weissaster : Ein romantisches Epos, nebst anderen Gedichten* が刊行された。このドイツ語タイトルを直訳すると、『日本の詩歌——ロマン的叙事詩〈白菊〉ならびにその他の詩』となるかと思うが、本稿では、『ちりめん本のすべて』に示され周知されている『孝女白菊の詩』という邦題を用いることにする。

『孝女白菊の詩』誕生の発端は第1節で述べたとおり、フローレンツの来日の契機となった井上との出会いにさかのぼることが出来る。フローレンツは来日前の1887（明治20）年に「孝女白菊詩」の独訳を済ませており、来日後には李白と井上の漢詩についてOAGで発表もしている。

東京大学在学中に漢詩への情熱を取り戻した井上は、卒業しても欧州留学がなかなか実現を見ないことに鬱屈した思いを詩作にぶつけ、「漢詩界に新機軸を促す」（井上、1973年、11ページ）意気込みで異例の長さの「孝女白菊詩」を書き上げた。当初は10齣以上の大長篇を目指したものの、突然ドイツ留学が決まり、急遽3齣の作品にまとめあげた（剣持、1968年、86ページ）というが、全404句の七言排律として完成した「孝女白菊詩」は、1884（明治17）年1月に1齣ずつ3度にわたって『郵便報知新聞』に掲載された後、井上の漢詩集『巽軒詩鈔』^{せんけん}下巻（阪上半七、1884年）に収められた。

井上は「孝女白菊詩」の作歌事情についてほとんど発言していないが、この漢詩は西南戦争によって離散した武士の一家の悲劇を主人公・白菊を中心に綴ったフィクションである。第1齣では父親を捜しに出た白菊が山寺で僧に身の上を語るまで、第2齣では山賊にさらわれた白菊を助け出した前夜の僧が、自身の素性を告白するまで、第3齣では身を寄せた麓の村で持ち上がった結婚話に困惑して自殺を図ろうとした白菊を僧が助け、共に故郷で父親と再会するまでが描かれる。第1齣では白菊がひとりで父親を捜す旅に出た理由が、第2齣では僧が実は白菊が捜す父親の息子・昭英であったという事実が、第3齣では白菊は赤子の頃に拾われた娘でいずれは昭英と夫婦にと母親が願っていたという事情が、徐々に明らかにされていくという巧妙な構成によって、読者は詩の世界に引き込まれていく。あらすじからはご都合主義的な展開と感じられるかもしれないが、「阿蘇山下荒村晚 夕陽欲沈鳥争返」という風景描写

で始まる「孝女白菊詩」は、白菊の遍歴を描いた長篇詩である。フローレンツはこの作品に出合って日本にも漢詩文化が存在することを知り、同時代の井上による挑戦に驚きを覚えたのではないだろうか。

しかしながら、『東の国からの詩の挨拶』に続いて『孝女白菊の詩』が刊行されたのは、すでにフローレンツが訳出を済ませていたからという理由だけではなく、井上の「孝女白菊詩」をもとに落合直文（1861-1903、以下、落合）が今様風の物語詩に仕立て直した「孝女白菊の歌」が一世を風靡していたという事実が背景にあったためだと思われる⁽²²⁾。落合の「孝女白菊の歌」は1888（明治21）年2月から学術雑誌『東洋學會雑誌』に発表され始め、同年12月から児童雑誌『少年園』に転載され始めるとたちまち大評判となり、『孝女白菊の詩』が刊行された当時、まだその熱は冷めていなかった。明治30年代はじめに明治学院で学んだ作家の生方敏郎（1882-1969）は、ミッションスクールでもその頃に最も流行っていたのは「孝女白菊の歌」と「ノルマントル号沈没の歌」だったと回想している（生方、1926年、11ページ）。このような状況は、武次郎やアーメランク社に『孝女白菊の詩』刊行に踏み切らせたひとつの要因となったはずである。

『孝女白菊の詩』にもライプツィヒ大学時代の恩師のひとり、エーバース教授（Georg Ebers, 1837-1898）への献辞がある。フローレンツはエーバース教授からエジプト語を学んだ（佐藤マサ子、1995年、198ページ）が、エーバース教授はエジプト学の権威であると同時に古代エジプトを舞台とした歴史小説の書き手でもあった。『孝女白菊の詩』上梓に際し、研究と出版活動を両立させたエーバース教授が思い起こされたのかもしれない。献辞には白い小菊の絵が添えられている。『孝女白菊の詩』には目次は掲載されておらず、序文に続く本文からページ表示（アラビア数字1から、各ページ左／右下）が始められている。

フローレンツは、ERSTER GESANG.（〔第1章〕）、ZWEITER GESANG.（〔第2章〕）、DRITTER GESANG.（〔第3章〕）と原詩の齣ごとに韻文として訳出しているが、例えば、冒頭4句の漢字28文字の翻訳にフローレンツは8行を費やしている。漢文の意味するところを適確にドイツ語で表現し、詩の形に整えるにはそれだけの語数が必要とされたのであろう。その結果、第1章は24ページ、第2章は20ページ、第3章は27ページとなり、挿絵を含めてではあるが全71ページの長い物語詩となった。全体として、フローレンツは井上の原詩にほぼ忠実に訳出していると思われるが、末尾の部分では大幅な加筆を行っている。原詩は、白菊と昭英に再会した父親が谷底からの脱出劇とその後の顛末を語って閉じられるのだが、フローレンツはここに賊軍に組した父親の懺悔を付け加え、最後に心の花を決して枯らさぬようにという白菊への呼びかけで結びとしているからである。井上の「誰知義氣亡人間 却存獸中寔可惜」と

いう表現から西南戦争時の行いに対する父親の悔恨の念を読み取り、その心情を詳しく説明する必要を感じたものと思われる。また、呼びかけ部分はフローレンツの創作といえるが、主人公の一途さこそがこの物語の原動力であったことを思い起こさせる効果をもたらしている。末尾の加筆が井上の了解のもとで行われたかどうかは不明である。

「孝女白菊詩」の訳詩に続いて掲載されたその他の詩は、まず、‘Nächtliche Heimkehr.’ (『夜の帰宅』)、‘Am Grabe der Geliebten.’ (『恋人の墓』)、‘Das eine Wort.’ (『ひとつの言葉』) の3編がこの順番で掲載された。「夜の帰宅」は、井上の漢詩「夜帰」を訳出したもの、「恋人の墓」は上田万年の「亡き人の墓」、「ひとつの言葉」は同じく上田万年の「ひとこと」を訳出したものである。「夜帰」は『巽軒詩鈔』上巻に収められたもので、「亡き人の墓」と「ひとこと」は『新體詩歌集』に収められた新体詩である。

これらに続いて、都々逸を訳出したという‘Dem scheidenden Geliebten.’ (『別れた恋人へ』)、‘Enttäuschung.’ (『失望』)、‘Kleinheit der Welt.’ (『世の小ささ』)、‘Bedingtes Geschenk.’ (『条件付きの贈り物』) の短詩4編が続くが、具体的に何をもとにしたのかは不明である。本文最後のページには、‘Das Gasthaus am Wege. I.’ (『草枕 I』) と題した^{たいらのただのり}平忠度 (1144-1184) の辞世の句と伝えられる「行暮れて^{ゆきく}木の下陰を宿とせば花や今宵の主ならまし」を訳出した短詩とこれに答えた読み人知らずの歌を訳出した‘Das Gasthaus am Wege. II.’ (『草枕 II』) と題した訳詩が掲載されている。なお、巻末には、4ページにわたって注の一覧が掲載されている。

『孝女白菊の詩』の刊行に関しても、『東の国からの詩の挨拶』の場合と同様に複雑な書誌事情が存在する。奥付に「明治二十八年九月廿五日印刷／同年同月三十日發行」と記されたものがある一方で、「明治三十年十二月十日第一版發行」と記した後の版が存在するからである。『ちりめん本のすべて』では、『孝女白菊の詩』の刊行年を1897 (明治30) 年としているが、これは後者を基に記述したためだろう。なお、『東の国からの詩の挨拶』の場合と同様に、表紙などへの版表示の有無と奥付情報の食い違いも見られる。

管見では、放送大学附属図書館所蔵の「縮緬紙」版『孝女白菊の詩』(放送大学機関リポジトリ Manapio : ファイル No.11117568193) が初版であると考えられる。そう考える根拠は、帙にも表紙や扉にも後の版とする版表示が見当たらないことと序文に‘Tokyo, im Herbst 1895’ という執筆時期が記されていることである。『東の国からの詩の挨拶』と同様に『孝女白菊の詩』もロイドが英訳しているが、英語版『孝女白菊の詩』の刊記は「明治三十年十二月一日印刷／同年同月十日發行」となっており、序文には、‘Tokyo, Autumn of 1895 (German Edition) Karl Florenz / Tokyo, Autumn

of 1897 (English Edition) Arthur Lloyd' ([東京にて、1895年秋(ドイツ語版)カール・フローレンツ/東京にて、1897年秋(英語版)アーサー・ロイド])と記されている。ロイドによって英訳された序文の内容は、上記のドイツ語版のものと一致するため、ロイドが『孝女白菊の詩』初版からフローレンツの序を訳出したのだと分かる。

放送大学附属図書館所蔵の初版奥付には、「明治二十八年九月廿五日印刷/同年同月三十日発行/発行者/長谷川武次郎/東京市京橋區日吉町十番地/著者/カ、フロレンツ/繪畫印刷者/小宮屋壽/本所區押上町/百五十二番地/文字印刷者/齋藤章達/東京市兜町二番地」と記されている。裏見返しのアーメランク社の書目広告には、『東の国からの詩の挨拶』ならびにライプツィヒのOtto Harrassowitz社との委託販売を謳ったフローレンツ訳『欧文日本昔噺』シリーズのMOMOTARO(『桃太郎』)、DIE DREI SPIEGELBILDER(『鏡』)、DER HÖLZERNE NAPF(『鉢かつき』)が掲載されている⁽²³⁾。

実は、平紙本においても「縮緬紙」版においても、「Tokyo, im Sommer 1898」([東京にて、1898年夏])とするフローレンツの「VORWORT」([序文])が掲載されているケースがほとんどであり、その内容はロイドが英訳したものとは若干異なる、背景の西南戦争に言及したやや長いものなのである。『孝女白菊の詩』は1898(明治31)年に再版されたことが判明しており⁽²⁴⁾、この時に序文を書き換えたのだと推察される。また、後の版の奥付に「明治三十年十二月十日第一版発行」と記されているのは、英語版の刊記と混同したためではないかと思われる。

平紙本の初版は確認出来ていないが、国際日本文化研究センターのちりめん本データベースで『孝女白菊の詩』の平紙本第7版(資料ID: 002196426)を参照すると、扉には『東の国からの詩の挨拶』の場合と同様に奉書紙版である旨の表記があり、大きさは『東の国からの詩の挨拶』と同じである。奥付には「明治三十年十二月十日第一版発行/明治四十年十月一日第七版印刷/同年同月十日発行/発行者/東京市四谷區/本村町三十八番地/長谷川武次郎/著者 カール、フロレンツ/印刷者/東京市麴町區/土手三番町二十七番地/金子徳次郎」と記されている。

序文と奥付を除いては、特に後の版との違いは見当たらない。帙の形態や絵も後の版のものと同じである。また、東京女子大学ちりめん本コレクションのデジタルアーカイブで「縮緬紙」版『孝女白菊の詩』の第8版(電子化No.0056)を確認すると、刊行されたのは1910(明治43)年12月20日となっている。以上から、『孝女白菊の詩』の初版は、平紙本も「縮緬紙」版も1895(明治28)年9月30日に刊行され、どちらも明治末期まで版を重ねたものと考えられる。『孝女白菊の詩』のドイツでの販売価格も『東の国からの詩の挨拶』と同様に平紙本は8マルク、「縮緬紙」版は6マルクで

あった。『長谷川武次郎出版目録』では、英語版もドイツ語版も価格は2ドル50セントとなっている。

最後に『孝女白菊の詩』の挿絵について述べておきたい。序文における言及から「孝女白菊詩」を訳出した部分の挿絵は蕉窓が、その他の詩の部分は芳宗が担当したことが分かる。前述のとおり、「孝女白菊詩」をもとにした落合直文の「孝女白菊の歌」の大流行は明治中期に起こるが、「孝女白菊詩」を散文化した「孝女白菊」という作品がそれよりもずっと早く、「孝女白菊詩」が『郵便報知新聞』に発表されたわずか半年後に『女学新誌』の「列伝」欄に掲載されていたことは、これまで看過されてきた⁽²⁵⁾。『女学新誌』は近藤賢三（1855-1886、以下、近藤）が巖本善治（1863-1942、以下、巖本）らと共に1884（明治17）年6月に創刊した月2回発行の雑誌であり、翌年7月にふたりが同誌を離れて新たに創刊した『女学雑誌』に比べて知名度は低いが、〈女学〉を標榜した初めての雑誌として重要と思われる。「孝女白菊」は『女学新誌』第4号（明治17年8月）から第7号（同年9月）まで4回にわたって掲載された無署名の作品だが、近藤によるものではないかと思われる⁽²⁶⁾。一部の省略や改変⁽²⁷⁾は認められるが、「阿蘇山^{やま}の烟たな引きわたりて日影やうやく薄くねぐらゆく鳥空なきわたりて西^{かた}の天あかねの色を染む…」と始まる「孝女白菊」は「孝女白菊詩」を読み下したような形で簡潔にまとめられており、各回に1葉ずつ尾形月耕（1859-1920、以下、月耕）による挿絵が掲載されたのが特徴である。落合の「孝女白菊の歌」が出現する前に、月耕による、(1) 蓑をまとった白菊の後ろ姿、(2) 山賊の前で琴を弾く白菊、(3) 兄の切腹を思いとどまらせる白菊、(4) 父親との再会の計4場面の挿絵と共に散文作品が雑誌に掲載されていたのである。『女学新誌』の購読者はそれほど多くはなかったと思われるが、「寄書」欄に掲載された〈白菊〉を謳った漢詩や和歌からは、読者の「孝女白菊」への好意的な反応が感じられる。

しかしながら、蕉窓の挿絵からは、先行する月耕の挿絵の影響は認められない。蕉窓は物語の展開どおりに各場面や風景を丁寧^にに描いているが、見開き空間を特に効果的に使った挿絵としては、蓑笠姿で父親を捜しに出る白菊を描いたものと末尾の谷底に落ちた父親と樹上の野猿たちを描いたものを挙げる事が出来る。詩の内容を反映して暗い色調の挿絵が多いが、後半の村での暮らしを描いた部分には明るい色調も使われている。

芳宗によるその他の詩歌の挿絵からは、新鮮味は感じられない。平忠度の歌に添えられた、桜の木の下で眠る旅装束の男の絵にはやや違和感を覚えるが、フローレンツの訳詩は歌い手を武士に特定しているわけではなく、単に野外での満ち足りた一夜を謳っていると解釈出来るので、この挿絵で特に問題はないのかもしれない。

表紙と帙は恐らく蕉窓によって描かれたと思われるが、表紙にはたくさんの花と蕾

をつけた白い小菊が、帙には花籠に活けた大輪の白菊が描かれている。『ちりめん本のすべて』でドイツ語版の帙が紹介されているが、英語版の帙もデザインは同じである。なお、英語版の表紙も『ちりめん本のすべて』で紹介されているが、ドイツ語版の表紙とは異なり、一重咲きの可憐な白菊のひと枝が描かれている。また、ロイドの英訳がフローレンツの独訳より若干短いために英語版からはドイツ語版の54ページに掲載された老人と使いの者の挿絵が削除されている。その結果、英語版『東の国からの詩の挨拶』の場合と同様に、英語版『孝女白菊の詩』の本文はドイツ語版より2ページ少なくなっている。

7. 『日本の詩歌』とその他のフローレンツによるちりめん本について

フローレンツの詩歌関連のちりめん本のもう1冊は、1896（明治29）年11月に刊行された *Bunte Blätter: japanischer Poesie* というタイトルの詞華集である。第5節で述べたとおり、『東の国からの詩の挨拶』のV部は‘Bunte Blätter’（[『さまざまな詩』]）と名付けられていた。*Bunte Blätter: japanischer Poesie* は直訳すれば（[『さまざまな詩——日本の詩歌』]）となると思うが、『ちりめん本のすべて』に示され周知されている『日本の詩歌』という邦題をここでも用いることにする。

『日本の詩歌』もまたフローレンツが選んだ日本の詩歌を独訳してまとめた詞華集だが、『東の国からの詩の挨拶』や『孝女白菊の詩』とは大きく異なる特徴を持っている。まずは、『日本の詩歌』がわずか12丁で収められた詩歌は9編という小品である点、次に日独併記となっている点、そして見返しと奥付の表記以外はすべて木版印刷によって作られている点を挙げる事が出来る。『日本の詩歌』では本文もすべて木彫文字によって記されているのである。

しかし、これらの手法は、『日本の詩歌』刊行に先立ってこの年の5月に刊行された「縮緬紙」版の *Smiling Book* と平紙本 *Glimpses of Japan* において、すでに試みられていた。これら2冊はどちらも華邨による美しい挿絵を共有しており、後にやはり同じ挿絵にベルギーの詩人であるエミール・ヴェルハーレン (Emile Verhaeren, 1855-1916) のフランス語の詩が添えられた *Images Japonaises* がバリ万博への出品用に刊行されるという複雑な経緯⁽²⁸⁾ を有しているのでここで詳しく論じる余裕はないが、日本文と欧文を併記するという方法と木彫文字の使用が上述の2冊に続いて『日本の詩歌』に用いられたことは確かだといえるだろう。

また、武次郎のライバルともいえる秋山愛三郎が1894（明治27）年に刊行した横長のちりめん本詞華集 *The Rokkasen*（『六歌仙』）では、左ページに英文は活字印刷に

よる横書きで、日本文は木彫文字で縦書きという日英併記で置かれ、右ページに画面いっぱいの華麗な挿絵が置かれていたので、これにヒントを得て武次郎は新しい形式による詞華集の刊行を思い立ったのかもしれない。

東京女子大学ちりめん本コレクションのデジタルアーカイブの『日本の詩歌』（電子化No.0184）を参照していきたいが、同コレクションのものは5丁オモテに印刷されているはずの日本文が欠落しているため、その部分は国際日本文化研究センターの外像データベースで公開されている同センター所蔵本（図書ID: 000122507）の画像データ（GID: GI017004）により補うことにする。平紙本でサイズは『東の国からの詩の挨拶』などよりもやや小さく、20.7センチ×16.8センチとなっている。

紅葉やイチョウなどの色とりどりの葉が描かれた表紙には、上部の白抜き部分に黒字で‘Bunte Blätter’、その下にすべて大文字の白抜き文字で‘JAPANISCHER POESIE/VON/KARL FLORENZ’、下部には白抜きで‘T. Hasegawa’s Verlag/Tokyo Japan’と書かれている。見返し中央には「版權所有」と横書きされ、その下に‘ALLE RECHTE VORBEHALTEN’、さらに下に‘DRUCK, ILLUSTRATIONEN & PAPIER/VON/T. HASEGAWA./10, HIYOSHICHO, TOKYO, (JAPAN).’と活版で印刷されている。次のページはInhalt（〔目次〕）で訳詩のタイトルが木彫文字で示されている。以下、目次どおりに内容を見ていきたいが、見開きページの左右どちらかに変体仮名使いの草書体による原詩とドイツ語の訳詩が記されている。

冒頭の‘Drei Fischergesänge aus Osaka.’（〔大坂からの漁師歌3編〕）は、『ちりめん本のすべて』で石澤小枝子が指摘しているとおおり、どれも作者不詳の俗謡と思われるが、Iの原詩は右から「山家にすめば／きくのいやさに／なみのおと／まつのおと／またも木の音」と書かれている。これは、「波の音聞くのいやさに山家にすめばまたも木の音松の音」の語順をあえて変えて表示したものではないかと思われる。IIの原詩は「はなに邪魔する雨かぜよりも恋に邪魔する憎い人」、IIIの原詩は「月のまろさの小石の道はどこのおいずこも違やせぬ」でIには前方に浜辺、後方に山村が、IIには風に散る桜の花、IIIには夜道を行く男女の姿がそれぞれ描かれている。

次の‘Der Optimist.’（〔楽天家〕）では、2つの扇形の空間に訳詩と原詩「さけのめばいつかこころもはるめいて借金とりも鶯のこえ」が書かれており、右ページ下方に黒羽織のまま寝そべった男性が、左ページ上部に梅の枝にとまった鶯が描かれている。‘Unglück im Glück.’（〔幸いの中の不幸〕）では、画面を斜線で区切り、訳詩と原詩「この家を七福神がとりまいて貧ぼふ（う）かみのいと（ど）ころもなし」が書かれ、あばら家に住む貧乏神を包囲する七福神が描かれている。‘Wahrer Schmerz.’（〔まことの苦しみ〕）では、右ページに蟬の絵と原詩「恋にこか（が）れて鳴く蟬よりもなかぬほたるか（が）みをこか（が）す」が、左ページに螢の絵と訳詩が置

かれている。‘Zwei Gedichte Der Dichterin Kaga-no Chiyo.’（[[加賀の千代による2首]]）のうちの I ‘Nach dem Tode des Gatten.’（[[夫亡き後に]]）では、右ページに原詩「起てみつ寝てみつ蚊やのひろさかな」と女性の絵、左ページに訳詩が、II ‘Beim Tode ihres Knaben.’（[[男の子の訃報に接して]]）では、見開きいっぱいに蜻蛉を追いかける男の子が描かれており、右ページに原句「蜻蛉つりけふは何こまで（で）いつたやら」が散らし書きされ、左ページに訳詩が記されている。

最後の ‘Elegie des Dichters Tajihhi no Daibu auf den Tod seiner Frau.’（[[詩人丹比大夫の妻の死を悼む挽歌]]）では、左ページに「左注」の「丹比大夫懐槍亡妻歌」を冒頭に置いた『万葉集』巻15の長歌3625番と反歌3626番を「由布左礼婆…」とすべて万葉仮名で記し、右ページおよび次のページに訳詩を掲載している。訳詩のタイトルの下には括弧書きで8世紀の『万葉集』巻15からである旨が示されている。画面のあちこちに落ち葉が描かれ、物悲しい雰囲気醸し出されている。実はこの挽歌もチェンバレンが『日本人の古典詩歌』の「挽歌」（『万葉集』）の部で ‘Elegy on the Poet’s Wife.’（「詩人の妻の死を悼む歌」）として長歌のみを英訳していた。フローレンツは反歌も合わせて訳出し、『東の国からの詩の挨拶』には載せずここに収めたわけである。

裏見返しには、「明治廿九年十一月一日印刷同月十日発行／東京市京橋區日吉町十番地／発行兼／印刷者／長谷川武次郎」と活版印刷による表示がある。裏表紙にも表紙と同じように色とりどりの葉が描かれ、「落葉」の文字が中央に白抜きで彫られている。『長谷川武次郎出版目録』では、『日本の詩歌』の価格は75セントとされているが、ドイツ国内での価格は不明である。

序や注などをつけた学術書的な体裁に仕上げられた『東の国からの詩の挨拶』や『孝女白菊の詩』に比べると、『日本の詩歌』は趣味的な美しい詞華集といえる。趣のある木彫文字と挿絵が調和して独特な雰囲気が醸し出された『日本の詩歌』は、『東の国からの詩の挨拶』や『孝女白菊の詩』には掲載することが出来なかった詩歌——フローレンツが取りこぼしたものを、新たな形でまとめてみた一冊のように思われる。『日本の詩歌』の挿絵は、『東の国からの詩の挨拶』や『孝女白菊の詩』に添えられたものよりずっと主張が強いものとなっている。視覚的要素に置かれた比重が高くなっており、それぞれの詩の内容に即した画面構成、色調、図柄が選び抜かれているという印象を受ける。シャーフは、『日本の詩歌』の制作過程において、フローレンツが武次郎を訪ねて文字の配置などを検討することもあったと証言している（Sharf, 1994年、23ページ）ので、挿絵についてもふたりで知恵を絞ったのかもしれない。ほとんどの部分を木版印刷で仕上げるといふ手法を用いたことにより、『日本の詩歌』では武次郎が思う存分腕をふるうことが出来たのではないだろうか。なお、

「縮緬紙」版『日本の詩歌』は刊行されなかったようである。

武次郎の後を継いだ次男の西宮與作によって1942（昭和17）年に再版された『日本の詩歌』の扉には‘illustrationen von Kwasson & Shōsō’（〔華邨と蕉窓による挿絵〕）と記されていることから、挿絵を担当したのは華邨と蕉窓と分かる。なお、表紙と裏表紙以外のすべての挿絵を『日本の詩歌』と共有するもうひとつのちりめん本を武次郎は1908（明治41）年に *Little Songs of Shade and Sunshine*（『日陰と日向の小さな歌』）と題して刊行している。東京女子大学ちりめん本コレクションのデジタルアーカイブで公開されている同書（電子化No.0202）の奥付には「明治廿九年十一月一日第一版獨逸文／發行同四拾一年十月廿日第二版英文／印刷同年十一月一日發行」とあり、「編纂兼發行者」は武次郎で「印刷者」は金子徳次郎となっているが、これは『日本の詩歌』を英訳したものではなく、イニシャル G. J. を名乗る著者が『日本の詩歌』用に描かれた挿絵に合わせて自作した英詩を木彫文字で刷った全く別の詞華集である。たしかに使用言語はそれぞれドイツ語と英語に違いないが、これを「第一版獨逸文」、「第二版英文」と記すのはいささか乱暴な措置と思われる。しかしながら、このような挿絵の使い方が可能となったのは、『日本の詩歌』が武次郎主導による独自企画であったからこそだろう。ちなみに、同書の扉にも挿絵が華邨と蕉窓によるものと記されている。

『東の国からの詩の挨拶』、『孝女白菊の詩』、『日本の詩歌』の3冊の刊行経緯とその内容を振り返ると、フローレンツが実にさまざまな主題ならびに形態の詩歌を『万葉集』の詩歌から明治期の漢詩や新体詩に至るまで幅広く選んでいることが分かる。『東の国からの詩の挨拶』を編むに際してはチェンバレンの『日本人の古典詩歌』に深く依拠し、「孝女白菊詩」の独訳作業は来日前に済ませていたとはいえ、教職につきながら10年足らずの年月の中で日本の詩歌への理解を深め、これら3冊を生み出したのである。日本の詩歌の世界の魅力を西洋の読者に伝えるべくフローレンツが独訳詞華集の構想を練り、武次郎がその出版技術を最大限に活かして多色刷りの美しい挿絵入り和装本として刊行する——ふたりの見事な協働によって誕生したのが、これらのちりめん本詞華集である。

最後に、詩歌関連以外のフローレンツによるちりめん本について簡単に触れておきたい。歌舞伎関連の2作品は、1900（明治33）年1月1日に刊行された *L' école de village (Terakoya)*（『寺子屋』）と同年9月10日に刊行された *Japanische Dramen Terakoya und Asagao*（『日本の芝居 寺子屋・朝顔』、以下、『日本の芝居 寺子屋・朝顔』）である。どちらもフローレンツの翻訳だが、前者はフランス語で歌舞伎『菅原伝授手習鑑』の「寺子屋」の段の脚本と九代目市川團十郎の肖像を含む歌舞伎の舞台についての解説が、後者はドイツ語で「寺子屋」の段に加えて『生写朝顔話』の「宿

屋」の段から「大井川」の段までの脚本が訳出され、芳宗による写実的な挿絵がふんだんに添えられた。

『ちりめん本のすべて』では『日本の芝居 寺子屋・朝顔』の刊行を1897（明治30）年とし、その後に *L' école de village (Terakoya)* が刊行されたと記されている。しかしながら、実際には、開催期間が1900（明治33）年4月15日から11月12日までのパリ万博のために、まず、*L' école de village (Terakoya)* が準備され、その後、『日本の芝居 寺子屋・朝顔』も出品された（大塚、2011年、8-9ページ）⁽²⁹⁾。フローレンツは1899（明治32）年5月のOAG例会で「寺子屋」の段の朗読を披露し、翌年のMAOGにその内容は掲載されている（佐藤マサ子、1995年、227ページ）。フローレンツの日本文化への旺盛な興味が演劇の世界にまで及び、武次郎の出版技術によって歌舞伎を具体的に海外に伝える2冊のちりめん本が生み出されることになったといえるだろう。大塚奈奈絵はフローレンツの『日本の芝居 寺子屋・朝顔』を契機として、ドイツで『寺子屋』の翻案劇がさかんに上演され、さらにそこから誕生したオペラが現代においても上演されていると報告している（大塚、2011年、12-16ページ）。

フローレンツの独訳による昔話関連のちりめん本については、前節で述べたとおり、『孝女白菊の詩』初版の裏見返しにライプツィヒのOtto Harrassowitz社との委託販売を謳った『桃太郎』、『鏡』、『鉢かつき』の3冊の広告が掲載されているほか、1898（明治31）年頃のものと思われる『長谷川武次郎出版目録』には、フローレンツ訳の『桃太郎』『鏡』『鉢かつき』の3冊が各50セントという価格と共に掲載されているので、この頃にこれらの3冊が刊行された可能性は考えられるが、今のところ、フローレンツが独訳した『鉢かつき』の存在は確認されていない。

筆者が確認することが出来たのは、1900（明治33）年刊行の『鏡』と1931（昭和6）年刊行の『桃太郎』と『勝々山』、1933（昭和8）年刊行の『思い出草と忘れ草』の4冊である。『欧文日本昔噺』シリーズのドイツ語訳は1885（明治18）年以來、アドルフ・グロート（Adolph Groth, 1855-1934）やヘドウィック・シプロク（Hedwig Schipplock, 生没年不詳）によって行われていた。『東の国からの詩の挨拶』などの成功を見た武次郎が、フローレンツ訳を投入して『欧文日本昔噺』シリーズドイツ語版の販売を拡大しようと考えたものと思われるが、『鏡』を除いては明治期には刊行されずに計画倒れに終わったのではないだろうか。昭和に入ってから『桃太郎』、『勝々山』、『思い出草と忘れ草』の3冊がフローレンツ訳で刊行された理由も、不明である。

また、第1節で述べたとおり、フローレンツは1906（明治39）年にアーメランク社から大著の『日本文学史』を刊行したが、この巻末には『東の国からの詩の挨拶』、『孝女白菊の詩』、『日本の芝居 寺子屋・朝顔』の書評を含む書目広告が掲載されてい

る。ここに6マルクの帙入り「縮緬紙」版のみが宣伝されていること、『日本文学史』が出た1906（明治39）年以降に出た版の『東の国からの詩の挨拶』その他の裏見返しに掲載されたアーメランク社の広告にも6マルクという価格のみが示されていることから、ドイツで一般的に流通したのは価格の低い「縮緬紙」版の方であったと考えられる。ちなみに、同じ裏見返しの広告から、『日本文学史』は仮綴じ版が7マルク50ペニヒ、製本版が8ドル50ペニヒで販売されたことが分かる。

『日本文学史』の巻末に掲載された Literarisches Centralblatt 誌の書評は、ちりめん本の挿絵や装丁を非常に高く評価し、『東の国からの詩の挨拶』と『孝女白菊の詩』における訳業の専門性の高さや重要性を称賛に価するとした上で、これらの美しいちりめん本は、どの図書館においても 'ammütigen Schmuck'（〔優美な装飾品〕）になるだろうとさえ述べている。このような表現は、ちりめん本の視覚的要素がどれだけ効果的であったかの証左といえるだろう。

おわりに

もし『東の国からの詩の挨拶』や『孝女白菊の詩』が『東方文学叢書』の『日本文学史』と同じように全く文字だけの書物であったとしたら、長年版を重ねて広く受容されることはなかったに違いない。和紙という珍しい素材、木版多色刷りの挿絵、異国の絵師による見慣れぬ風景や風物——これらを全て合わせた視覚的要素が西洋の読者を引き付け、ページをめくらせたのだと思う。

『東の国からの詩の挨拶』、『孝女白菊の詩』、『日本の詩歌』の3冊を中心にその内容について述べてきたが、フローレンツが翻訳の対象とした詩歌の多様性は高く評価されるべきだと思われる。日本の詩歌の世界の豊かさを西洋の読者にいかに伝えるべきかと考えた時、ちりめん本の可能性に注目し、その優れた視覚的要素を味方につけようとフローレンツは思い立ったのではないだろうか。アウグスト・プフィッツマイヤーによる『万葉集』の独訳には調査が及ばなかったが、チェンバレンの英訳やフローレンツの独訳に対する評価などと合わせて、いずれ比較文学的視点からの検討がなされるべきではないかと思われる。

『日本の芝居 寺子屋・朝顔』がドイツの演劇界や音楽界に影響を与えたように、『東の国からの詩の挨拶』や『孝女白菊の詩』がドイツの文芸の世界に何らかの刺激を与えることはなかったのだろうか。ドイツ文学研究の面からのアプローチも必要だと思われる。

長期間に渡って版を重ねた『東の国からの詩の挨拶』と『孝女白菊の詩』に関して

は、あまりにも多くの異版があるために調査は難航したが、フローレンツがより良い書物を目指してある時は序文を付け加え、またある時は既存の序文に加筆したことが判明した。また、フローレンツの指示によるものかどうかは不明だが、『東の国からの詩の挨拶』では、いくつかのページで初版の挿絵の一部を描き換えるという措置がとられたことも分かった。おざなりにただ版を重ねたのではなく、読者に真摯に向き合って手を加えたものと思われる。

ドイツに帰国後もフローレンツは武次郎と手紙での交流を続けたという（Sharf、1994年、43ページ）。武次郎にとってフローレンツは『東の国からの詩の挨拶』他の質の高いちりめん本作品をもたらした恩人ともいえる人物であり、フローレンツにとって武次郎は自分の希望どおりのちりめん本を創り上げてくれた大切な友人であったことだろう。『東の国からの詩の挨拶』、『孝女白菊の詩』、『日本の芝居 寺子屋・朝顔』の3冊は、武次郎の出版活動において、質・量ともに最高峰を誇るものだと断言してよいだろう。これだけのページ数のちりめん本をおよそ20年に渡って刊行し続けたという実績は、高く評価されるべきであるし、武次郎の出版活動の財政基盤をより強固なものとしたに違いない。また、多くのちりめん本が西洋で受容されたことにより、ちりめん本という独自の形態に対する認知度が高まったのも確かだろう。木版印刷の職人の世界も「日清戦争後は急に人手不足に見舞われた」（広瀬、1987年、139ページ）というが、社会が急速に工業化に向かった明治中期から大正初期という激動の時代に、武次郎は丁寧な手仕事にこだわって優れたちりめん本作りに邁進したのである。

明治末期以降も武次郎の出版活動は続くが、『欧文日本昔噺』シリーズやフローレンツによるちりめん本などの財産を大切に守りつつも、次第にその中心は「縮緬紙」製カレンダーや広重や北斎などの浮世絵の複製版、蕉窓や芳宗など同時代の絵師による木版刷り一枚画の販売に移行していったことを1919（大正8）年以降に作成された『HASEGAWA 販売カタログ』から読み取ることが出来る。武次郎の出版活動全般を眺めてみた時、フローレンツが関わった『東の国からの詩の挨拶』などのちりめん本が、内容的にも挿絵や製本などの技術的な側面においてもいかに優れたものであったかが改めて分かる。

ちりめん本が全くの稀覯本となった現在、ちりめん本の研究には各機関によってオンライン公開されている画像データの活用が欠かせないものとなっている。本稿執筆においても、多くの異版を画像で確認することによって初めて解明し得たことがいくつもあった。今後、さらに多くの機関が所蔵するちりめん本のデータを公開することによって、新たな発見がもたらされることだろう。また、湯川史郎が提唱するように、いつの日か世界各地のちりめん本データをまとめた統合データベースが構築され

ることを願いたい。多言語で展開された武次郎のちりめん本出版活動は、多国籍のさまざまな分野の研究者が関わって初めてその全体像が明らかになると思うからである。

注

- (1) 本稿では、武次郎が木版印刷と活版印刷の技術を駆使して生み出した、さまざまな紙質および形態の刊行物を総称する際には「ちりめん本」と記し、そうでない場合は平紙本、「縮緬紙」版などと記すことにする。外国語に拙訳を添える場合は、〔 〕で示し、旧字体は引用に限って用いるものとする。なお、本稿において敬称は略す。
- (2) フローレンツの経歴については、佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』第二編の年譜考証に拠った。
- (3) 1877（明治10）年4月に東京開成学校と東京医学校が統合され、東京大学が設立された。井上はこの第一期生のひとりである。その後、東京大学の呼称は、東京大学→帝国大学（1886年）→東京帝国大学（1897年）→東京大学（1947年）と変遷するが、煩雑さを避けるために本稿では東京大学に統一する。
- (4) 井上の経歴については、『懷舊録』ならびに没後に井上哲次郎三十年祭記念として刊行された『井上哲次郎自伝』に拠った。拙稿「『孝女白菊の歌』（一）——明治の少女向け読み物の軌跡（二）」『論叢 児童文化』第42号（くさむら社、2011年）ではさらに詳しく井上の経歴を述べている。
- (5) 佐藤マサ子は『孝女白菊詩』のドイツ語訳完成を明治21年2月13日としているが、『懷舊録』224ページには明治20年2月13日とある。
- (6) 佐藤マサ子は就職には有賀の尽力があったように捉えているが、『井上哲次郎自伝』に「自分と知合であつた関係から便宜を得て、自分よりも先に日本へ赴き、東京帝大の独逸語の講師となり、尋いて教授となつた」と記されていることから、井上の推薦があったものと考えられる。
- (7) *Geschichte der japanischen Litteratur* は土方定一と篠田太郎によって同書の半分ほどに当たる平安時代までの部分が翻訳され、『日本文学史』（楽浪書院、1936年）として刊行された。
- (8) 第2版までアーネスト・サトーと A. G. S. ホーズの共著だったが、第3版（1891）からチェンバレンと W. B. メイソンの共著となった。
- (9) アーサー・ロイドの経歴については、白井堯子『福沢諭吉と宣教師たち——知

られざる明治期の日英関係』の第5章および第7章に拠った。

- (10) 『浮世絵鑑賞事典』によると、中奉書の大判のサイズは縦50センチ×横36.4センチ程度なので、奉書紙版を謳った平紙本に使用されたのは、これを半分にしたものではないかと思われる。
- (11) ちりめん本の表紙に版表示が初めて登場したのは、1892（明治25）年に再版された『日本の小唄』で表紙に Second Edition（〔第2版〕）と印刷された。
- (12) 初版と考える根拠として、「国立国会図書館所蔵ちりめん本目録」（2001）に記載されている No.101に関する書誌情報、関西大学図書館の該当書書誌詳細情報に「その他の表題」として「和歌集」とあること、学校法人京都外国語大学創立60周年記念稀観書展示会の目録（2007）に記載されている No.138に関する書誌情報ならびにドイツ語版には序文が掲載されていないという同目録99ページの記述、2008（平成20）年に福岡県立図書館で行われた九州大学附属図書館主催の展覧会の資料である田村隆による解説「ちりめん本と日本昔噺」にページ表示方式の違いと‘Jung Urashima der Fischer’（〔若き漁師浦島〕）の挿絵の違いが指摘されている点を挙げる事が出来る。
- (13) 放送大学機関リポジトリ Manapio で画像が公開されている『東の国からの詩の挨拶』平紙本第9版（1906）のデータ（ファイル No.11117568230）には付属の外袋の画像も含まれており、外袋に貼られた価格一覧から『東の国からの詩の挨拶』、『孝女白菊の詩』、『日本の芝居 寺子屋・朝顔』がいずれも平紙本8マルク、『縮緬紙』版6マルクであったこと、さらにこの時すでに刊行されていた『日本文学史』の価格が8マルク50ペニヒであったことが判明した。
- (14) インド文学史、仏典の翻訳、ゾロアスター教など東洋のさまざまな文化研究を扱った叢書の1冊として *The Classical Poetry of the Japanese* は刊行された。
- (15) チェンバレンは『万葉集』から選んで英訳した詩歌にはタイトルをつけて掲載した。川村ハツエはこれらのタイトルや序文および注を訳出し、チェンバレンの英訳詩から該当歌を調査して原歌ならびに歌番号などを示した。
- (16) 川村ハツエは原歌を特定できずとしたが、原歌は『万葉集』巻13の3332番だと思われる。
- (17) 小島庸亨・佐藤典子「国立国会図書館所蔵ちりめん本目録」掲載の No.101 *Dichtergrüsse aus dem Osten : japanische Dichtungen* 和歌集の解説による。
- (18) 中野三敏によると、画帖仕立てとは印刷面を中表に中央で折って重ね、印刷していない面の両端に糊をつけて貼り合わせ、表紙を付ける装丁方法で主に画帖類に用いられた。
- (19) 解説より名前の公表を希望しなかった絵師がひとりいたと分かるが、彼が描い

たのは p.31の犬ではなく、描き手についての言及がない p.33の女性の絵と思われる。

- (20) 英語版ではこの社名は削除され、下部左手の波間に 'T. Hasegawa/Tokyo, Japan' と記されている。
- (21) 『絹と光 日仏交流の黄金期（江戸時代～1950年代）』164ページに掲載された1871（明治4）年12月に制作された横浜開化絵の1枚。
- (22) 前掲の拙稿「孝女白菊の歌」（一）——明治の少女向け読み物の軌跡（二）」では「孝女白菊の歌」誕生の背景について詳しく述べたほか、これに続く拙稿では「孝女白菊の歌」の受容が低年齢層にまで及び、講談社の絵本にまで広がる経緯を辿った。なお、大原敏行は『明治長編詩歌 孝女白菊——井上哲次郎・落合直文からちりめん本、鷗外、画の世界まで——』で「孝女白菊詩」の各句を「孝女白菊の歌」と比較しつつ丁寧に解説している。
- (23) 全く同じ内容のアーメランク社の書目広告が『東の国からの詩の挨拶』第4版の裏見返しにも掲載されていると湯川史郎は述べている（湯川、2019年、128ページ、132ページ）。第7節で述べるが、フローレンツと『欧文日本昔噺』シリーズの翻訳については不明な点が多く、Otto Harrassowitz社の委託販売も実施されたかどうか不明である。フローレンツ訳で存在が確認されているものは、*Die drei Spiegelbilder*（『鏡』）と *Momotaro, oder, Pfirsichling*（『桃太郎』）の他、*Der Katschi-Katschi Berg*（『勝々山』）と *Die Blumen "Treu-Gedenke-Mein" und "Vergessenheit"*（『思い出草と忘れ草』）である。
- (24) 東京都立中央図書館には「縮緬紙」版『孝女白菊の詩』第2版が所蔵されており、その刊行年は1898（明治31）年となっている。
- (25) 杉本邦子『明治の文芸雑誌——その軌跡を辿る』の『女学新誌』解説ページには、同誌で「孝女白菊」が挿絵と共に連載された旨が記されているが、筆者も含め、これを取り上げて論じた者はいなかったと思われる。
- (26) 近藤には近藤賢三編『神童詩文』第1集（摘英社、1884年）もあり、これには児童による優れた漢詩作品や近藤による漢文の序も収められているため。
- (27) 「孝女白菊」では、簡略化のためか兄の昭英を養子という設定に変更し、白菊が拾われた子どもだというエピソードは省略されている。
- (28) 「縮緬紙」版 *Smiling Book* ならびに平紙本の *Glimpses of Japan* と *Images Japonaises* の3冊はどれも華邨の挿絵に詩を添えた詞華集であり、奥付では刊行年は1896（明治29）年5月となっているが、実際には、*Images Japonaises* はパリ万博に向けて1899（明治32）年か1900（明治33）年に作成されたと考えられている（大場、2001年、3ページ）。*Glimpses of Japan* には、カナダの宣教師で

青山学院で働いていたベンジャミン・チャペル (Benjamin Chappell, 1852-1925) が選んだロングフェローやワーズワースなどの英詩が木彫文字で添えられている。『Smiling Book』に関しては国立国会図書館に下絵一式が寄贈されており、大塚奈奈絵によって調査が行われているが、『古今和歌集』からの和歌の本文と英訳などが木彫文字で添えられたものである (大塚、2016年、22-28ページ)。

(29) 今のところ、1897 (明治30) 年刊行の『日本の芝居 寺子屋・朝顔』は確認されていない。

参考文献

〈邦文〉

- 石澤小枝子『ちりめん本のすべて——明治の欧文挿絵本』三弥井書店、2004年
- 井上さやか「『万葉集』と欧文挿絵本——その今日的意義について——」『万葉古代学 研究年報』第8号、奈良県立万葉文化館、2010年
- 井上哲次郎『懐舊録』春秋社松柏館、1943年
- 井上哲次郎『井上哲次郎自伝』(井上哲次郎三十年祭記念) 富山房、1973年
- 生方敏郎『明治大正見聞史』(中公文庫) 中央公論社、1978年
- 大塚奈奈絵「テラコヤ (寺子屋) 「日本」を発信した長谷川武次郎の出版」『国立国会図書館月報』604/605号、国立国会図書館、2011年
- 大塚奈奈絵「木版挿絵本のインパクト—1900年パリ万博に出品された「寺子屋」—」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.14、日本大学大学院総合社会情報研究科、2013年
- 大塚奈奈絵「長谷川武次郎のちりめん本 *The Smiling Book* の下絵をめぐって」『国立国会図書館月報』659号、国立国会図書館、2016年
- 大場恒明「明治期におけるエミール・ヴェルハーレン移入」『麒麟』10号、神奈川大学、2001年
- 大原敏行『明治長編詩歌 孝女白菊——井上哲次郎・落合直文からちりめん本、鷗外、画の世界まで——』、創英社/三省堂書店、2015年
- 尾崎るみ「「孝女白菊の歌」(一)～(五)——明治の少女向け読み物の軌跡(二)～(六)」『論叢 児童文化』第42号～第46号、くさむら社、2011年2月～2012年2月
- 尾崎るみ「弘文社のちりめん本『欧文日本昔噺』シリーズ誕生の背景——長谷川武次郎・デイビッド・タムソン・小林永濯の協働」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』23、白百合女子大学児童文化研究センター、2020年

- 尾崎るみ「弘文社のちりめん本『欧文日本昔噺』シリーズの形成と『西洋昔噺』シリーズの開始」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』24、白百合女子大学児童文化研究センター、2021年
- 尾崎るみ「長谷川武次郎のちりめん本出版活動の展開——『欧文日本昔噺』シリーズが20冊に達するまで」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』25、白百合女子大学児童文化研究センター、2022年
- 京都外国語大学付属図書館『文明開化期のちりめん本と浮世絵』京都外国語大学付属図書館、2007年
- 小島庸亨・佐藤典子「国立国会図書館所蔵ちりめん本目録」『参考書誌研究』第54号、2001年3月
- 剣持武彦「井上巽軒「孝女白菊詩」の成立考——その比較文学的考察——」『二松学舎大学論集』43巻、二松学舎大学、1968年
- 佐伯梅友（校注）『古今和歌集』岩波書店、1981年
- 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之（校注）『万葉集』（一）～（五）、岩波書店、2013年～2015年
- 佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』春秋社、1995年
- 佐藤道信「鑑画会再考」『美術研究』340号、国立文化機構東京文化財研究所、1987年
- 白井堯子『福沢諭吉と宣教師たち——知られざる明治期の日英関係』未来社、1999年
- 杉本邦子『明治の文芸雑誌——その軌跡を辿る』明治書院、1999年
- 高橋克彦『浮世絵鑑賞事典』創樹社、1977年
- 田村隆「ちりめん本と日本昔噺」（九州大学附属図書館主催展覧会解説資料）九州大学学術情報リポジトリ、2007年
- チェンバレン、B. H.（川村ハツエ訳）『日本人の古典詩歌』七月堂、1987年
- 中西進『万葉の秀歌』（ちくま学芸文庫）筑摩書房、2012年
- 中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』（岩波現代文庫）岩波書店、2015年
- 中野幸一・榎本千賀編『ちりめん本印影集成 日本昔噺輯篇 第4冊 スペイン語版 カタログ3種 解題』勉誠出版、2014年
- 長谷川武次郎「木版画の輸出」『美術新報』13巻3号、画報社、1914年
- 馬場大介『近代日本文学史記述のハイブリッドな一起源——カール・フローレンツ『日本文学史』における日独の学術文化接触』三元社、2020年
- 平井呈一編「年譜」『明治文学全集48 小泉八雲集』筑摩書房、1970年
- 平井呈一「作品解題」『明治文学全集48 小泉八雲集』筑摩書房、1970年
- 平岡敏夫「カール・フローレンツ」日本近代文学館編『日本近代文学大事典』第3巻、講談社、1977年

広瀬辰五郎『江戸絵噺いせ辰十二ヶ月』徳間書店、1978年

フィットレル、アーロン「『万葉集』歌の序詞の翻訳について——ドイツ語訳と英訳における方法と歴史的な変遷」『日本語・日本学研究』12、東京外国語大学国際日本研究センター、2022年

ポラック、クリスチャン『絹と光 日仏交流の黄金期（江戸時代～1950年代）』アシェット婦人画報社、2001年

宮内伸子「俳句のドイツ語訳の変遷について」『富山大学人文学部紀要』第71号、富山大学人文学部、2019年

湯川史郎「放送大学附属図書館所蔵「ちりめん本コレクション」調査ノート——メディア史の視点から——」『放送大学研究年報』第37号、放送大学、2019年

〈英文〉

Chamberlain, Basil Hall, *The Classical Poetry of the Japanese*, Trübner & Co., 1880.

Sharf, Frederic A., *Takejiro Hasegawa: Meiji Japan's Preeminent Publisher of Wood-Block-Illustrated Crepe-Paper Books*, Peabody Essex Museum Collections. Volume130, No.4, 1994.

〈データベース〉

国際日本文化研究センターちりめん本データベース

<https://shinku.nichibun.ac.jp/chirimen>

国立国会図書館デジタルコレクション

<https://dl.ndl.go.jp>

白百合女子大学図書館貴重書デジタルアーカイブちりめん本コレクション

<https://www.shirayuri.ac.jp/lib/archive/rarebooks/crepepaperbooks/collection.html>

東京女子大学比較文化研究所所蔵ちりめん本コレクションデジタルアーカイブ

<https://www.lab.twcu.ac.jp/~icsc/collection/chirimen.html>

放送大学機関リポジトリ Manapio（貴重書→ちりめん本）

<http://ouj.repo.nii.ac.jp>